
ポケットモンスター フリーザー物語

樹氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター フリーザー物語

【Nコード】

N3270I

【作者名】

樹氷

【あらすじ】

ある日、森で倒れていた記憶喪失のフリーザー。一匹のグレイシアとの出会いによりフリーザーは徐々に記憶を取り戻していく。謎の組織、世界の危機、その先で彼らが見たものとは？

プロローグ〜森の中で〜

ここはポケモンだけの世界。

ポケモン達が独自の文化をもって生活している。

とある小さな森の中、そこを1匹のグレイシアが歩いていた。

「ふう、さすがにここまで歩くと疲れるわね。

たしかこの近くにきれいな泉があったはず。

そこで一休みしようかな。」

そう言っている彼女の名前はグレイス。

訳あって自分の町からここまで来ている。

そしてそのまま歩いていったのだった。

そのころ、同じ森の小さな泉では異変が起こっていた。

空間に歪みができていたのだ。

しばらくするとその歪みはなくなった。

だが、その歪みのあった所には1匹の青い鳥ポケモン、フリーザーが倒れていた。

のちにこの二人は出会い世界の運命を大きく変えることになるということはまだ誰も知らない…。

プロローグ〈森の中で〉（後書き）

皆様、はじめまして。樹氷と申します。

今回、初投稿そして、初連載になります。

よろしければ感想等、お願いします。

文章が苦手な自分ですが、がんばって書いていくので
よろしく願います。

第一話 出会い(前書き)

主人公はフリーザー……。の、はずなんです、
しばらくグレイスの視点でお楽しみください。

第一話 出会い

「やっとついたー。」

グレイスが泉に着いたのは異変が起きてから数分後のことだった。

「あいかかわらずここも変わってないわね。」

ここは泉の水がきれいでありさらに空気がとても澄んでいるので遠くからも観光に訪れるポケモンが多い観光スポットなのだ。グレイスが一休みしようとしたそのとき、泉のそばに1匹のポケモンが倒れているのが見えた。

「た、大変！」

それはあのときのフリーザーだった。当然そんなことは全く知らないグレイスは自分の持ち物からきすぐすりやらを取り出し始める。フリーザーには大きな傷はなかったが、かなりのダメージを受けているようでとても弱っていた。

しばらくしてフリーザーがすやすや眠っているのを確認したグレイスは泉のそばで考え事をしていた。倒れていたフリーザーを慌てて治療したものの今になって考えてみれば謎は多い。

今までこのあたりで傷ついたポケモンが倒れていたなんて話は聞いたことが無いし、そもそもなぜあんなところに伝説のポケモンであるフリーザーが倒れていたのか、解らないことだらけだった。

「こうなったら本人に聞くしかないわ。」

そうしてフリーザーの目が覚めるまで待っていることにしたのだった。

それから数時間後、
グレイスが気づいたころにはまわりは暗くなり、すでに夜になっていた。

あのあとずっとフリーザーのそばにいたが眠ってしまったようだ。
それもそうだ、だって歩きつかれていて休みにきたら、こんどは傷ついた伝説のポケモンに遭遇なんて

誰が予想しただろうか。そんなこんなで疲れがたまっていたみたいだ。

すっかり目が覚めてしまったグレイスはフリーザーがまだ眠っていることを確認すると、とりあえず焚き火をするための枝など集めることにした。

泉から離れ、森の出入り口に近いところでグレイスは枝を集めていた。

フリーザーがいつ目覚めてもいいように泉の近くで集めていたのだが、いつのまにかこんなところまで来ていたようだ。

十分に枝を集めたグレイスが泉まで戻ろうとしたそのとき、森の入り口から1匹のポケモンが入ってくるのに気づいた。そのポケモンの気配を感じた瞬間、グレイスは茂みの中に隠れていた。そのポケモンから危険な気配を感じたからだ。

グレイスは昔から勘がいいほうで、グレイスの町でも一番の勘の持ち主だ。グレイスが素早く行動したので、入ってきたポケモンにはまだ気づかれていない。そのポケモンはしばらく入り口で立ち止まっていた。

しばらくするとそのポケモン、ザングースが口を開いた。

「あゝ、めんどくせゝ、なんでこんな仕事を俺がやらなきゃいけないんだよ。この森の中にいるだろうけど探すなんてつかれるし、どうせあれだけダメージを与えたんだ、あいつが生きてるなんてありえないしなゝ。面倒だから帰っていいよな。」

と、言つて結局帰つていった。

「何者なの？あいつ…。」

あのザングースを追つて正体を確かめたい、という衝動に駆られたがフリーザーのところに戻らなければいけないことを思い出し、グレイスはよりいっそう周りを警戒しながら泉まで戻つていった。

泉まで戻り火をおこしながらさっきのポケモンの言つた言葉について考えていた。

グレイスはしばらく考えたのち、あのポケモンとフリーザーはなんらかのかかわりがあり、フリーザーはあのポケモンの仲間ではなく、どうやら命を狙われているようだ、という結論に至つた。

火をおこした後、昼に何も食べていないことに気づき、いそいで食事の準備をする。

「うん。こ、こは？」

そんな声をグレイスが聞いたのは夕飯を食べてから、これからのルートを確認しようとして地図を広げている最中のことだった。あのフリーザーがようやく目覚めたようだ。

グレイスはフリーザーに近づき答える、

「ここは『レインシティ』の近くの森の中よ」

「き、君は誰？」

「わたしは、グレイスよ。訳あって旅をしているの。あなたは？」

「俺は……フル。確か、そんな名前だった。」

「確か？もしかしてどうしてこの森に倒れていたのか覚えてないの？」

その言葉に頷くフル。

「じゃあ、どこから来たかとかは？」

「全然。」

グレイスはその言葉に大きなため息をついた。

グレイスがゆっくり眠ることができるのは、これから数時間後になるだろう。

記憶喪失のフリーザーなんてどうしたことが。

第一話 出会い（後書き）

なんかセリフが少ないような…。

次回は多くなります。たぶん……。

第二話 初バトル

結局、グレイスがようやく寝ることができたのはあの会話から二時間後のことだった。

あの子の会話で聞きだせたことは、日常生活のこととバトルについてすこしのことなら覚えていいるということだけだった。とは言ってもバトルができるなんて、それほど頼もしいことなどない。たとえば記憶喪失といえどフルはあの伝説のポケモンフリーザーだ、その能力はあまり失われていないだろう。明日の朝グレイスはフルにある提案をすることにした。

翌日、

「えっ、バトル？」

「そうよ。バトルを通じて何か思い出せるかもしれないわ」

「でも、昨日も言った通りバトルのことはあまり覚えてないって…」

「すこしは覚えてるんでしょ？それだけあればじゅうぶんよ」

結局、フルは半ば強制的にバトルをすることになったのだった。

数十分後には二人は『レインシティ』にいた。あの森では狭いとい

うグレイスの意見でバトルフィールドのあるこの町まで移動してきたのだ。ここ『レインシティ』は1年の半分以上雨が降っているためこの名がついたという。

グレイスにつれられてしびしびバトルフィールドにむかうフル。目的地にたどりつくまであまり苦労しなかった。

「さあ、はじめましょう！ルールは簡単よ。どちらかが倒れるか負けを認めるまで戦うの。準備して！」

お互いにあらかじめ引いてあつた線の前に立った。

「始め！」

審判がいなかったのでグレイスが試合開始を宣言する。

その声を聞いた瞬間、フルの目の色が変わったようにグレイスには見えた。

「あなたから始めていいわよ」

「じゃあ遠慮なく。かぜおこし！」

フルの放つ風はかなりの威力があるようで、見ただけではかぜおこしだとは思えないほどのものだった。

グレイスはワザの威力を確かめるためワザを受けるが、

「うっ……」

見た目通りの威力でかなりのダメージを受けた。

「やるわね。じゃあこっちはこおりのつぶて！」

無数の氷がフルめがけて放たれる。フルは避けようと動くがさすがに早すぎて避けられなかった。だがフルにダメージはあまり無いようだ。

「たいしたことないね。こっちもこおりのつぶて！」

「かげぶんしん！」

これ以上ダメージを受けたくないグレイスはかげぶんしんで回避するが、

「甘い！こなゆき！」

フルの放つこなゆきによって分身は消滅する。だが、

「かかったわね！ミラーコート！」

「くっ……」

あいてからのダメージが大きければ跳ね返せばいい、というのがグレイスの考えだった。

この作戦でフルにかなりダメージを与えた。同時に自分もダメージを受けたが…。

「やるじゃねえか！だったらこれで終わらせる、げんしのちから！」

げんしのちからはいわタイプ、いまのグレイスが受けたらまずい。

「こっちもこれで終わらせるわ！めざめるパワー！」

グレイスは、電気を帯びた波動のようなものを放つ。

そして二つのワザはぶつかり爆発が起こる。

「はあ、はあ、あんたけっこうつよいな」
「フルもやるわね。まさかここまでとは思わなかったわ」

これ以上やると、二人とも動けなくなると思い、今回はここまでにした。

そして二人はポケモンセンターへ向かったのだった。
ちなみに、この世界のポケモンセンターは回復ができたり、宿泊ができるだけでなく、買い物ができるショップがあったり食事をすることができるレストランがあったりする。しかし、町ごとに設備が違うため中には意外なものがあるところもある。

ポケモンセンターで休んだ二人はさっきのバトルについて話すために道端のベンチに座っていた。

「それで、さっきのバトルで何か思い出せた？」

「すこしは思い出せたさ。最後のげんしのちからはバトルの途中で思い出したワザだし」

「そういえば、バトルの最中にフルの口調が変わっていたような……。どうして？」

「それは……、よくわからない。でも、もしかしたら記憶を失う前の自分がそうだったのかも
しれない」

「ほかにはおもいだせたの？」

「そのことについてだけしか」

「そう……」

でも、これでグレイスには分かったことがあった。フルはバトル

を通じてワザを思い出せた。

ということとは、これからフルルが経験する事柄によっては、もっといろいろなることを思い出せるかもしれない。

「ちよつと提案があるんだけど」

「なに？」

「わたしといつしよにこない？ そうすればいろいろなことを経験できるし、それで何か思い出せるかもしれないわ」

「たしかにそうかもしれないけど……」

「じゃあきまりね！」

これはグレイスの覚悟のうえの提案だった。フルルとともに行動するということは昨夜のザングースのような危険な人物との遭遇も十分考えられる。それを承知のうえでそう提案したのだった。それに、グレイスにはフルルの過去を知ってみたいという好奇心もあった。グレイスにはまだ企みがあるようだが……

「そうときまればさっそく……」

そう言って向けられた視線はグレイスの荷物。

グレイスの不吉な笑みに、まさかとフルルは思うが、

「この荷物もって」

「俺は荷物係かよ！」

「まあまあ、そうゆうこといわずに。ね！」

またしても半ば強制的に荷物係されるフルル。

「それじゃあ、出発ね！」

この荷物、何が入ってるんだよ。
そう心の中でつぶやきつつ荷物の重みに不安を覚えるフルであった。

第二話 初バトル（後書き）

バトルの終わり方……、二つの技がぶつつかって爆発、なんて定番のパターンだなあ。

と、思ってしまった（笑）

ちなみにフリーザーは性別不明ですが、ここでは という設定です。

そろそろ話すことも無くなってきたから次回から誰か呼ぼうかな。

第三話 二人を追うもの(前書き)

今回の前半部分は……はっきり言ってどうでもよい話です。
むしろ後半部分のほうが……
新キャラ登場の予感？

第三話 二人を追うもの

『レインシティ』から少し離れた山道に二人、フルとグレイスはいた。

「おそーい、はやくー」

山頂付近で離れたところにいる人物に呼びかけているのがグレイス、そして、

「そんな無茶な」

グレイスから20メートルほど離れたところにいるのがフルである。

「はやく〜」

「はいはい、わかりましたよ。」

上から聞こえてくる無茶な要求にぶっきらぼうにこたえる。これも全部グレイスが押し付けた重すぎるバッグのせいだ。飛んでいくことができれば、上から無茶な要求がとんでくることもないのだが、荷物が重すぎる…。

結局、20メートルを歩くのに5分程度かかってしまった。

「あら、遅かったわね」

「遅かったわねじゃねーよ。そもそもこのバッグなに入ってんだよ？」

「それは、旅に必要なものよ」

確かに旅の荷物多いだろうが、この重さは異常だ。こうなったら中を確認するしかない。

「えっ、中になが入ってるか見たい？いいわよ」

グレイスの了承を得てさっそく作業を始める。

始めにでてきたのは食料だった。

「これは必要だな」

つぎはきすぐすりなどの回復用のものがでてきた。

「これも必要だな」

つぎは…、

「なんですか、これは」

「それは地図。見れば分かるでしょ」

「地図、か……。いやいや、俺がききたいのはこの下にある本はなんだ、てことだよ」

「それは…、旅行用の雑誌よ」

はあ、雑誌ですか。ということはあれですか、これは旅行ですか。と、たずねてやるうかと思っただが、ここで突っ込んでしまったら負け、そんな気がしてやめた。

その後も、色々なゴミならまだしも、どこかで見たことがある木彫

りのグレッグルや、『もりのヨウカン』（たぶん腐ってる…）まで
でてきた。
そして…、

「こ、これが…」

それは、バッグの底にあった。黒い鉄の玉、『くろいつてつきゅう
だった。

これじゃ飛べない……。しかも、ひとつではなかった。よく見ると
5つほどあった。

「こつ、これは、前に捨ったやつよ」

「なんのためにだよ」

「うつ、それは…、トレーニングになると思って…」

嘘だとフルはすぐ見破った。明らかに動揺しているのが分かった
からだ。フルはそれ以上追求しても無駄だと思い、とりあえず『
くろいつてつきゅう』だけでもここに置いていくことにした。

『くろいつてつきゅう』を捨てながらフルは思った、

「なんでこんなものもってるんだ？」

フルがその理由を知ることとは、永久にないだろう。

ようやく『くろいつてつきゅう』がなくなり飛べるようになったフル
には、つぎ町へ行くことなど簡単なことだった。グレイスをのせ
て飛び、あつという間に次の町『グリーンシティ』に着いた。

ここ『グリーンシティ』はその名のとおり、草木の育ちやすい環境で、町には緑があふれている。そのためこの町に住むポケモンの大半はくさタイプのポケモンだった。

「この町は有機栽培で作った紅茶が有名ないわよ」

あの旅行雑誌を見ながらそんなことを言い始めるグレイス。もはや観光気分だ。

「これは飲むしかないわね」

勝手に話を進めてすたすた歩いていってしまふ。しかたなくフルはそれについていく。

そのころ、そんな二人の様子を遠くから見つめる二匹のポケモンがいた。

「あの二人じゃな」

背中に大きな木が生えたポケモン、ドナイトスが言った。

「そうだね。あのグレイシアは前に手紙を送ったグレイスで間違いないね」

ドダイトスの木にとまっているフクロウのようなポケモン、ホーホーがそれにこたえる。

「そしてあのフリーザーは……」

「フルル、じゃな。くれぐれもあの二人にあのこと言わないようにな」

「大丈夫だよ。そんな簡単に言ったりしないよ」

そんな会話をして、二人のあとを追っていった。

『グリーンシティ』のとある喫茶店にて、

「は、おいしいわね。さすが有名なだけあるわ」
「確かに」

紅茶を飲みながらくつろぐ二人。しかたなくついてきたフルルも紅茶の味にすっかり満足しているようだ。そんな中、口を開いたのはグレイスだった。

「そういえば、もうじきこの町でバトル大会が開かれるそうよ。せっかくの機会だし、出てみない？これからのことを考えてバトルの経験を積んでおく必要があるだろうし」

たしかにグレイスの言っていることは正しい。これから何が起ころ

か分からないことを考えると、今のフルでは経験不足だ。

「確かにな」

こうして二人は大会に出場することになった。

大会は明日、そこで二人は適当な宿で休むことにした。

翌日、

「今日はいよいよ大会ね」

「ああ」

「お互いがんばろう!」

「そうだな」

そんな会話をしながら宿をあとにし、二人は大会のエントリーに向かった。

「あの二人、大会に出るようだよ」

大会にエントリーする二人を見ながらドダイトスに話しかける昨日のホーホー

「どうする？大会になんか出たらまずいんじゃない？」

「いや、大丈夫じゃろう。これでわしらも大会に出れば二人に近づくことができる」

「それもそうだね。それならエントリーしなきゃ」

そして、その二人も受付へ向かったのだった。

第三話 二人を追うもの（後書き）

グレイス「なんなの！？あの前半部分！」

それはあなたの意外な一面みたいな、

グレイス「どうでもいい……」

まあまあ。てか、呼んでもないのにどうして……？

グレイス「暇だったからね」

暇って……。

グレイス「で、後半の二人は？」

それはもう少し先で……

グレイス「ふん」

第四話 グリーンシティバトル大会（前書き）

これから三話ほどバトルです。

第四話 グリーンシティバトル大会

ついに『グリーンシティ』のバトル大会が開幕した。

大会と言っても、出場したのは八人。受付のドールによると、この町の人々はバトルをするよりもバトルを見るほうが好き、だとか

……。

確かに、観客の数は多かった。

「けっこういるわね」

選手用のテントから外に設置された観客席を見たグレイスが言った。テントにいるのはフルたちを含めて八人、選手全員がそろっていた。

フルたちのほかには、ウソッキー、カポエラー、ドクケイル、ソルロック、そしてドナイトスとホーホーがいた。

それぞれ思い思いのことをしてすごしている。

フルはふと、視線を感じて後ろを振り返る。そこには何やらひそひそと話し合っているドナイトスとホーホーがいた。

「あの二人……」

フルはあの二人に見覚えがある気がした。

「フル？どうしたの？」

「いや、…なんでもない」

そのとき、審判のヘラクロスがテントに入ってきた。

「皆さん、そろそろそれぞれの対戦相手を発表します」

そう言うと、壁にトーナメント表を貼り始めた。表を貼り終わるとそそくさとテントから出て行った。

「俺の対戦相手はあのウソツキーみたいだな。しかも一番目か」

「わたしの相手はカポエラーね」

「そろそろ第一試合が始まるので準備してください」

テントの入り口から顔をのぞかせたヘラクロスの言葉でウソツキーが外へ出る。

「がんばってね」

グレイスの声援を受けフルも外へ出る。

試合会場は異様な熱気に包まれていた。

観客がざわつき、試合が始まるのを今か今かと心待ちにしている。さらに、

「わー！フリーザーだ！」

「えっ？マジ！？どこどこ？」

「すげー！」

と、伝説のポケモン、フリーザーの登場によってさらに盛り上がるのだった。

ヘラクロスに指示されフィールドに立つフル、相手はいわタイプのウソツキー、相性は悪いがフルにとってそんなこと関係なかった。

「それではいいですね？始めっ！」

「いくぞ！こおりのつぶて！」

先に仕掛けたのは、フルだ。放たれた氷はウソツキーめがけて飛んでいく。だが、

「ロックカット」

目にもとまらぬスピードでそれを避ける。そしていきまに接近し、

「アームハンマー」

「くっ……」

アームハンマーを受けてしまう。地上では不利だと思い、フルは上空へと飛び上がる。

「ならこっちは、こっこそくいどっ！」

フルはウソツキー以上のスピードで行動する。

「なっ、どこだ!？」

「後ろだ!こなゆき!」

「なに!っわぁ!」

フルの繰り出す強力なこなゆきにウソツキーは倒れてしまった。

「ウソツキー戦闘不能、フリーザーの勝ち！」
「思ったより弱かったな」

フリーザーの勝利に会場がいつそう盛り上がる。

「やったわね！さすがフル！」

試合が終わりフルはテントで休んでいた。フルの勝利にグレイスのテンションもあがっていた。

「それはそうと、つぎの試合はおまえの番だろ。そっちもがんばれよ」

「わかってるって！」

そしてしばらくして、

「二回戦目の方は準備してください」

また同じようにヘラクロスが呼びにくる。

「それじゃあ行って来るね」

「ああ。がんばれよ」

「両者、準備はいいですね？では、始め！」

「いくぞ！でんこうせつか！」

先攻はカポエラー、

「すなかけ！」

「チツ！」

グレイスはすなかけで攻撃を不発にさせ、さらに、

「アイアンテール！」

「ぐっ！」

接近してきたところをアイアンテールで上へと打ち上げる、

「これで終わりよ！こおりのつぶて！」

とどめのこおりのつぶてを見事に命中させ、

「カポエラー戦闘不能、グレイシアの勝ち！」

勝利したのだった。

「すごかったな、さっきの連続攻撃」

ふたたびテントのなか。ともに最初の試合が終わり、すっかりくつろいでいる。

「あとはドダイトスとドクケイルの試合とホーホーとソルロックの試合だね」

またしてもヘラクロスが同じように呼びにきてドダイトスとドクケイルがテントから出て行く。

「どっちが勝つのかしら」

「さあな。でもこれであいつらの力を見ることができない」

このときグレイスは気付かなかった。フールの言ったあいつらとは、試合をする二人ではなくあのドダイトスとホーホーのことを指していたという事に……。

だが、これからの試合の結果はフールの予想をはるかに超えたこととなった。

「それでは、始め！」

ヘラクロスの合図とともに動いたのはドクケイル、

「先攻はもらいます。ぎんいろの…」

が、ワザを放つ前にはすでにドダイトスのすがたはなかった。

「遅いのう。それにワザのキレも悪い」

「っ！いつの間に！むしのやぎ…」

「遅いと言ってるじゃろう。ストーンエッジ」

ドクケイルは無数の岩の直撃を受けそのまま気を失ってしまった。

「ドクケイル戦闘不能、ドダイトスの勝ち！」

ドダイトスとドクケイルの試合はドクケイルがワザを出す前に終わった……。

またまたテントにて、

「あのドダイトス、かなり手ごわいぞ」

「わたし、あんな試合する人初めて見た……」

そうこうしているうちに次のホーホーとソルロックの試合が始まる
うとしていた。

「両者、準備はいいですね。では、始め！」
「はがねのつばさ」

ホーホーがそうつぶやいた瞬間、すでにソルロックは倒れていた。
一瞬の出来事に観客だけでなく審判まで動揺している。

「ホーホーの勝ち……。で…、い、いいのかな？」

想像をこえた出来事だったためフルとグレイスは言葉を失っていた。
た。

それからしばらく、なんといいか分からなかった。その後、
フルがぼつんとつぶやいた。

「あの二人、何者なんだ……」

第四話 グリーンシティバトル大会（後書き）

フル「バトル多いね」

そりゃ、全試合を三話でまとめなきゃいけないから

フル「でも7試合中、4試合終わったけど……」

これからのが長いでしょう

第五話 グリーンシティバトル大会 準決勝（前書き）

今回もバトルです。

はたして無事決勝に進出できるのか？

第五話 グリーンシティバトル大会 準決勝

あれから2時間後、昼の休憩をはさみ、フールたちは再び選手用のテントにいた。

あいてにワザを出させる前に勝負を決めるドダイトスや、一瞬で相手を倒すホーホーなど、残る相手は強豪ぞろいだ。

「おもしろくなってきたじゃねえか」

と、フールはつぶやく。

グレイスはもう気付いているが、最初のバトル以来、フールは以前の人格を取り戻しつつあるのか最初に会ったときと明らかに雰囲気が変わってきている。

変わったのは雰囲気だけではない。口調が変わったり、ワザの使い方がうまくなったりしている。

この調子なら、完全に記憶が戻るのも時間の問題だろう。と、グレイスは思っていた。

「それでは、次の試合の組み合わせを発表します」

例のごとくヘラクロスが入ってきて言う。

「準決勝一回戦目は、フリーザー対ホーホー、二回戦目はグレイシア対ドダイトスです」

「やっぱりか……」

「厳しいわね」

二人とも予想していたが、やはり早くもこの状況はかなり厳しい。

「試合はすぐに始まるので、すぐに準備してください」

そして、ヘラクロスが出て行く。

「気をつけて」

「ああ、絶対に勝つて来る」

フルはそう言ってテントから出て行く。

一方、ドダイトスたちは、

「いきなりフルが相手とは不運じゃのう」

「大丈夫でしょ。で、どうすればいいの？」

「好きなように。だが、あまりアツくなりすぎないようにな。こゝで記憶が完全に戻ってしまったら厄介だからの」

「了解」と、言っただけでもフルに続く。

会場は午前より、かなりの見物客でにぎわっていた。

今回の大会は強豪ぞろいだという噂があったという間に広がったようだ。

「さあ、準備はよろしいですね。準決勝第一試合、始め！」

ついに試合が始まった。フルは最初の試合のような素早い攻撃がくるのを警戒し、身構える。だが……、

「なぜ動かない……？」

ホーホーは攻撃する気配を見せず、とつぜん口を開いた。

「バトルの前に自己紹介させてもらうよ。僕の名前はゲイル、よろしく」

突然の自己紹介に、会場全体が静まり返る。フルは啞然^{あぜん}としていた。

「君、強そうだから挨拶くらいはしておこうと思ってね」

自己紹介に、ではない。彼から発せられた声に、だ。

そこ声は、あまりにも子供っぽかった。いや、もしかしたらまだ子供なのかもしれない。

そんな彼があれほどのバトルをしたのか。そう考えると信じられなかった。

「俺はフルだ。いいバトルをしような」

しかし相手が誰であろうとお構いなしのフルはすぐに名乗る。

そして二人は羽ばたき、空へ舞い上がる。

「それじゃあいくよ。こうそくいどう！」

ゲイルは一瞬でフルに接近する。

なるほど、さっきの速さの原因はそれか……。などと一瞬思ったが、

「こうちもこうそくいどう！」

接近されたら危険だと判断したフルは素早く距離をとる。

「そしてこおりのつぶて！」

「それは危ない。まもる！」

ゲイルの作り出したバリアによって氷は防がれる。

「こんどはこっちの番だよ。エアスラッシュ！」

ゲイルの放った空気の刃はフルめがけて飛んでくる。

「俺だって、まもる！」

フルの作り出すバリアでエアスラッシュを防ぐ。

「まだまだ！」

「いつ、いつのまに!?!」

ゲイルはフルの後ろに回りこんでいた。

「はがねのつばさ！」

「くっ……」

その威力にフルは大きく飛ばされる。しかし、地面ぎりぎりのところで持ちこたえ、反撃の体勢にはいる。

「まだだっ！もう一度こおりのつぶて！」

「そんなものきかないよ！まもる！」

またしても氷を防がれる。だが、

「こつちだ！」

「なっ……！」

フルはさっきのゲイルのように、彼の背後に回りこんでいた。

「同じ手を使わしてもらっぜー！はがねのつばさー！」

またしてもゲイルと同じようにワザをだすフル。

そして、吹き飛ばされるゲイル。

「ふう、油断したよ」

体勢を整えたゲイルは言う。

「こつなっ たら次で決める！はがねのつばさ、そして、こつそくい
どうー！」

ゲイルは高速で移動しながら連続攻撃を繰り返してきた。

「危ねえ！くそっ、はがねのつばさー！」

フルは翼でつきつきと繰り返される攻撃を防ぐ。

「どうすれば……」

ゲイルの攻撃を防ぎながら考える。そして、

「いくぜー！こなゆきー！」

「そんな攻撃、当たらないよ！」

「それはどうかな。かぜおこし！」

粉雪はフルルの風によってフィールド全体に吹き荒れ、

「なっ………！」

「そこか！こおりのつぶて！」

雪によって動きの止まったゲイルに氷の礫を放つ。

「うわあっ」

フルルの氷の礫は見事命中、ゲイルは下に落ちていった。

「ホーホー戦闘不能！フリーザーの勝ち！」

ヘラクロスがフルルの勝ちを宣言する。地面に降り立ったフルルはゲイルのもとへ向かう。

「楽しいバトルだったぜ」

「うん、僕も楽しかったよ。でも負けるとは全く思わなかった……」

「おめでとうフルル！さすがね！」

テントに戻ったらグレイスが若干、興奮気味に言った。

「ありがとう。次はそっちの番だろ？そっちもがんばれよ。」

「分かってるって。次の試合に勝って決勝でまた戦いましょう！」

そうして次の試合に向けて意気込むグレイスだった。

一方、フールたちから離れたところで会話しているあのドダイトスたちは、

「やはり負けたか。記憶を失ったから大丈夫、じゃなかったのか」

「それが、予想以上に強くて……」

「まあ、しかたないじゃろう。あやつの実力はなかなかのものじゃ。おまえは休んでおれ。あとはわしがやるう」

「でも、次はグレイスとの試合でしょ、あの人も結構強そうだったけど……」

「わしの実力なら、あの程度たいしたことないわい」

「そう、だったら僕は休んでくるよ」

そして、ゲイルはテントから立ち去っていった……。

「決勝が楽しみじゃの」

そうつぶやき、次の試合のためテントから出て行ったのだった。

そして、数分後のバトルフィールド、

「さて、準備はいいですね。それでは、準決勝第二試合、開始！」

バトルが始まってドダイトスは動こうとしない。そして、

「ゲイルのやつが自己紹介したからの、わしの名はライト」

「わたしはグレイスよ。よろしく」

お互いに名乗り終わり……、

「こおりのつぶてー！」

「はっぱカッター！」

お互いのワザはぶつかり相殺される。

「どこを見ておるのじゃ？アイアンテール！」

「いつのま……」

そう言い終わる前にアイアンテールの直撃を受けてしまう。

「こっとなったら……、あられ！」

「ほう、自分の特性を利用する気が」

フィールドに降り注ぐ霰によってグレイスの姿が見えなくなる。

「どこにいったかの」

霰のなかじつと周りを警戒するライト。そのとき、

「ふぶきー！」

どこからともなく吹雪が飛んでくる。

「それくらい分かっておる。まもるー！」

冷静に判断したライトは吹雪を防ぎ、さらに、

「そつちか……。にほんばねー！」

一瞬でグレイスの場所をつきとめたライトは日本晴れで天候を変える。

「ソーラービーム！」

グレイスが気付いたときにはソーラービームの直撃を受けていた。

「グレイシア、戦闘不能！ドダイトスの勝ち！」

グレイスが最後に聞いたのは自分の敗北を告げる声だけだった……。

「うつ……、わたし、どうなったの？」

グレイスが目覚めたのはテントの中、

「やっと目が覚めたか！」

目が覚めたグレイスにフールが話しかける。

「おまえ、覚えてないのか？あのライトってやつに負けたんだぞ」
「わたしが、負けた？」

グレイスはすぐに状況を理解したようだ。

「それにしても、あのライトってやつはかなり強いみたいだな。決
勝が楽しみだぜ」

「わたしの分までがんばってよね」

「もちろん！」

絶対に勝つ！そう誓ったフールであった。

第五話 グリーンシティバトル大会 準決勝（後書き）

なかなかのバトルだったね

フル「かなり疲れたよ」

お疲れさん。

と言うことで、決勝もよろしく。

フル「また疲れるのか」

第六話 グリーンシティバトル大会 決勝戦（前書き）

ちよつと急展開だったり……

第六話 グリーンシティバトル大会 決勝戦

あの試合から数十分後、体力を回復したフルは再びバトルフィールドに立っていた。

反対側にはドダイトス。そう、ライトがいる。ついに決勝戦が始まるうとしていた。

「両者準備はよろしいですね？」

審判のヘラクロスの声に、二人ともうなずいて答える。

「それでは、決勝戦、開始！」

試合開始から動いたのはフルだ、

「かぜおこし！」

凄まじい風がライトに迫るが、ライトは難なくそれを避ける。

「ほう、なかなかの威力じゃのう。避けるのはたやすいがの」

「だったら、こおりのつぶて！」

「わしの速さの秘密を見せてやるう。ロックカット！」

ライトはさっきよりも比べ物にならないくらいの速さで氷を避ける。

「くそ、またか」

「それだけかね。こんどはこっちの番じゃ。はっばカッター！」

「こおりのつぶて！」

フルはさっきの試合のように氷の礫で相殺する。

「やはりそうきたか」

「こつそくいどつー！」

フルは一瞬の間をつき、飛び上がると同時にライトの背後に回りこむ、

「こおりのつぶてー！」

至近距離からの氷の礫に、ライトも避けることができず当たってしまふ。その威力にライトはふらつく。

「なかなかの威力じゃな」

「まだだっ！かせおこしー！」

フルはふらつくライトに容赦なく攻撃をする。素早い連続攻撃に対応できなかつたらしく、またしても攻撃は命中する。

「くっ……、けっこつきくのう。だが、にほんばれ！」

フィールドに強い日差しが降り注ぐ。

「ま、まさかー！」

「そのまさかじゃよ。こつこつせいー！」

「させるか！こおりのつぶてー！」

回復させまいと、ライトに攻撃する。その氷はライトに命中するが、

「なぜだ！？」

攻撃が命中した瞬間、そのライトの姿は消えていた。

「それはわしの身代わりじゃよ」

その声が響いたのはフルの後ろからだった。フルが振り向くとそこには二人に増えたライトが立っていた。

「くっ……、また身代わりか……」

「その通りじゃ。こんどはこっちからいかせてもらっぞ。タネマシンガン！」

「ちっ、こっすくいどう！」

「それで避けられるかの」

ライトの言った通り、タネマシンガンの速度が速すぎてすでに五六発当たっている。

さらに……、

「これはどうかね」

ライトがそう言った瞬間、フルの翼を何かがかすめた。

「なっ…、はっぱカッターか？」

「その通り」

時折、もう片方のライトがはっぱカッターを放ってくるのだった。

それから、数分間フルは攻撃を避け続けた。だが、すでにかかなりのダメージを受けていた。

「こうなったら、あれにかけるてみるしかない」

フルは動きを止める。そして、

「かげぶんしん！」

「そうきたか！ならばすべて消すまで！」

ライトのタネマシンガンによって分身はつきつきと消されていく。

「これで最後じゃ！」

最後の一人にワザが当たる。が、それは本体ではなかった。

「なっ、どこへいったのじゃ？」

「ここだっ！」

「いつの間にも上へ！？」

フルは影分身のあと、ライトに気付かれないように上空へと移動していた。

ライトはフルのほうを向こうと上を向くが……、

「くっ、日の光がっ……」

ライトの日本晴れを利用した作戦は見事成功。ライトが怯んでいる隙に急降下を始める。

「もらった！これで決める、れいとうビーム！」

急降下しながらフルはれいとうビームを放つ。初めて出すワザでコントロールできるか不安だったが、ちゃんとワザをだせたようだ。

光線は狙い通りに片方のライトに命中した。
だが、

「……残念じゃったな」

どうやら当たったのは分身のほうだ。

「くっ……！ハズレか……。だが、まだ攻撃のチャンスは残っているー！れいとう……うつー!?」

とつぜんめまいを感じふらつくフル、

「どうやら効いてきたようじゃな」

「い、いつたい、何を……?」

「どくどくじゃよ。あのはっぱカッターにどくどくを仕込んでいたのじゃ」

「毒が効いてきた、と言うわけか……くっ……!!」

「そろそろフィニッシュとしよう。ソーラービーム!」

草タイプのソーラービームは飛行タイプのフルに対して効果はいまひとつ、だがフルの残り少ない体力を削りきるにはちょうどいくらいだった。そして、フルは力なく落ちていった。

「フリーザー戦闘不能、ドダイトスの勝ち!」

「おまえの力、見させてもらったぞ」

そう言ってライトはテントに戻っていった。

そのころ、観客席から怪しいヤミラミがひそかに立ち去っていったことに誰も気付かなかった。

フルもグレイスと同じように目覚めたのはテントの中だった。

「負けちゃったわね」

「……………」

「でも仕方ないわよ……………。あんなに強い人が相手だったから……………」

「……………」

「ねえ、元気だして」

「……………なあ」

「えっ、どうかした？」

「なんか、あのライトって……………。前に何回か会った事がある気がするんだ」

「えっ！？それって……………記憶を失う前に会っているってこと？」

フルはうなずく。

「じゃあ……、追いかけて聞きいてみる？」

「そうするしかないか……」

すぐにあの二人を追いかけてようと急いで外へ出る。だが、追いかける必要はなかったようだ。

テントを出るとそこにはあの二人がいた。

「あつ、でてきたよ！」

「ようやく出てきたようじゃな」

フルたちが見たのはドダイトスの背中の木にホーホーがとまっているという、奇妙な光景だった。

「あつ、あなたたちまだいたの？というか、それなに？」

グレイスがゲイルを示しながら尋ねる。

「あつ、これ？このほうが落ち着くもんで」

「それはともかく、二人に聞きたい事があるんじゃが」

「聞きたい事って？」

「二人はこれからどこへ行く気じゃ？」

「えっ？どうしてそんなこと……」

「わしらはこれからどうしようか迷っておったんじゃ」

「それで、二人が旅をしているようだったから、できればその旅について行けたらいいな。とおもってね」

「だから、わしらも同行させてもらえんかのう」

いきなりそんなこと言われても……、困る。

答えに困ったフルは、グレイスに視線を送る。

「うん。フルはどう思う？」

結局俺か……。なんて思いながら、自分の考えを伝える。

「えっ、俺はいいと思うぜ。旅の仲間が多いほうがいいし」

「だったらそうしましょ」

「ありがとう」

「これからよろしくね」

そして彼らの旅は新たな仲間を加え、再び始まるのだった……

第六話 グリーンシティバトル大会 決勝戦（後書き）

と、言うわけで、新しい仲間のライトとゲイルに来ていただきました。

ゲイル「どうも」

ライト「よろしく、じゃな」

で、君達はどうして二人の旅に？

ゲイル「それは言えないよ」

どうしてぞ？

ライト「いずれ分かるさ」

目的があるのか……

第七話 敵、そしてグレイスの目的（前書き）

久々の更新〜

フル「なんだかうれしそうだな…」

そりゃテストが終わったし〜

フル「だから一週間も更新しなかったのか…」

ところで君は何で元気がないのかな？

フル「それはこれを読めば分かるよ……。では、ぶいんぞ〜」

第七話 敵、そしてグレイスの目的

人の町から離れたところにある、人の全く寄り付かない溪谷。

この溪谷にはある秘密があった。

人の寄り付かないからこそできる事なのだろう。アジトの設置というものは。

アジトはきつちり地面の中に埋まっており、入り口も目立たないようにしてある。

偶然誰かに見つけられるなんて間抜けなことなど、まず考えられないだろう。

そのアジトの中、人の気配がない長い廊下を、一人のザングースが早歩きで歩いている。

先ほど、ヤミラミから届いた情報を一刻も早く届けなければ。そう考え、さらにペースを早める。

そのアジトのとある一室、他の部屋よりも広いその部屋で、緑の体をした大きなポケモン、バンギラスは机の上の書類の整理をしていた。そこへ、ドアを乱暴に開け入ってくるポケモンが……

「おい！ヴァン！報告がある！」

ヴァンと呼ばれたバンギラスは書類から目を離し、入ってきたポケモンを見て言う。

「なんですか、トロイさん。騒々しいですね」

その容姿とは裏腹に丁寧な言葉遣いなヴァン。一方トロイと呼ばれたザングースは慌てているように見えた。

「そんなこと言っている場合じゃねえ！大変なことになった！」

「ほう、その大変なこととやらを聞かせてもらおうじゃないですか」

どうせいつもの冗談だと思い、軽い返事をする。いつもトロイはふざけた冗談でほかのポケモンを困らせる。嫌な性格だ。

「さっき、ヤミラミから連絡があった。『グリーンシティ』へ偵察に行ったやつだ」

「ほう、それでどんな事でしたか？」

「それが……奴が……」

トロイが滅多に見せない真剣な表情に、ヴァンは嫌な予感がした。

「まさか、奴とは……」

すぐに、ヴァンの考えを読み取ったトロイは続ける、

「そつだ、あのフリーザー。フルだ。奴が生きている……」

「なっ！ばかな！あいつはボスが始末したんじゃないのか!？」

その事実にはヴァンはいよいよ取り乱してしまう。

「そのはずだ。だが、あいつは生きていた……」

「なぜだ!?!どうなっている!?!こうなってしまったら我々の計画が……。そもそも、お前があの子を確認に行かなかったからこうな

「つたんじやないのか!？」

「仕方ないだろ!あの時は他の仕事があつて忙しかつたんだし、ボスがやつたことだから生きているとは全く思わなかつたんだ!」

ここでいつもの冷静さを取り戻したヴァンはゆっくり話し始める。

「……あなたの言い訳など聞きたくもありません。しかし……これでは計画に支障が出るのでは?」

「いや、その心配はないな。報告によれば、奴は記憶を失っているのか分からないが、以前のように『あのワザ』を使つていなかつたらしい」

「記憶を?どうしてですか?」

「分からない。だが、これであいつは脅威じゃなくなつたな」

それを聞いたヴァンはすぐに作戦を立て始める。彼はこの組織の中でもトップクラスの策士だ。おまけに力もある。ボスほどではないが……。だからこそ、このアジトのリーダーを務めているのだろう。まあ、彼がボスに信頼されているのも理由の一つだと思うが。

「それでは、すぐにでも『暗殺者』を送り込んで……」

あつという間に作戦を考えたヴァンはそれを伝えようとするが、トロイがすぐにそれを遮る。

「いや、それはやめたほうがいい」

「どうしてですか?」

「やつの周りにはグレイシアとドダイトスとホーホーがいる」

「グレイシアはともかく、ドダイトスとホーホーとは、まさかあいづらじゃないでしょうね」

「そのまさかだ。やつら、もう動き始めたらしい……。どうする?」

「動きの早い連中ですね。奴らがいるのでは手出しが出来ません。とりあえず、ボスに報告しておきましょう。あなたの失態も同時に」
すぐに机の書類にとりかかろうとしたヴァンにトロイは訊ねる。

「で、俺はどうすればいい？」

「今の任務を続けてください。記憶がないのなら、今は脅威ではありません。一応、『追跡者』に尾行してもらいます」

「あいつらに頼むのか？いっそのこと、俺が始末してもいいんだがな」

「それはまずいと思いますよ。あなたが接触してフールの記憶が戻ってしまったらどうするのですか？『あのワザ』の前では、たとえこの私でも、やつを倒すことはできないでしょう。そもそも……今のあなたでは無理です」

「ちえっ、せめて俺のワザを完成させたらなあ。あいつとも互角に戦えるのに……」

トロイは自分の爪を見ながらつぶやく。

「今は我々の目的が最優先です。そのことをきちんと頭に入れて行動してください」

「はいはい、分かっていますよ」

「分かったなら早く自分のやるべき事に集中してください」

「はい」
「と言って、トロイが部屋から出て行くのを確認したヴァンは、

「これから忙しくなりそうですね」

机の整理をしながらそうつぶやいたのだった。

遙か離れた所で、そんな会話が繰り返り広げられていることなど全く知らないフールたちは、日も暮れてきたということで、昨晚休んだ宿に再び宿泊することにした。

その夜、今日のバトルで疲れているはずなのになぜか眠れなかったフールは、宿のベランダから外の景色を眺めていた。しばらくすると、おそらくフールと同じく眠れなかったのだろうか、ちょうど寢室から出てきたグレイスがフールに気付きベランダへ出てきた。

「眠れないみたいだな」

フールと同じように外を眺め始めたグレイスに話しかける。

「フルこそ。あれだけのバトルをしたばかりなのによく疲れな
いわね」

「疲れてないわけじゃないさ。今はなんとなく眠れないだけ」

「奇遇ね。わたしもなかなか寝付けなくて……」

二人が見ている景色は一面に広がる森。あれは町だろうか、いくつ
かの明かりが見える。そして、遠くの方にはいくつもの山があった。
今は真夜中だが、月が照らしてくれるので、遠くまでよく見えた。

「ねえ、あなたは自分の記憶を失う前、どんなことをしてたと思う
？」

「えっ、いきなりそんなこと言われてもなあ」

「予想でいいわよ」

うーん、とフルはしばらく考える。

「これはあくまで希望だけど、何事もなく普通に過ごしていた。そ
んなところかな」

「ふーん。普通ね。やっぱり普通がいいよね……」

フルはこの機会を使って気になっていてことを質問した、

「ところで、グレイスはどうして旅をしているんだ？しかも一人で」

フルの質問に、はっとしたように過去のことを頭から振り払うグ
レイス。

「えっ、わたしがなんで旅をしているかって？」

フルは頷いて答える。

「そういえば、まだ言っていなかったわね。わたしはここからまだまだ離れたところにある『W・P』^{ダブルピー}と呼ばれる組織の本部に向かうためよ」

え？とフルは思った。フルはこの旅が修行か何かのためとばかり思っていた。

それじゃあ……

「俺の記憶はどうなるんだ？助けになつてくれるんじゃない……」

「もちろん、そのことについても考えてあるわ。実は、『W・P』では常に二人で行動するのがルールなの。ほんとは、あつちでパートナーを決めるんだけど……あなたみたいに強い人はあまりいないもの。だから、あなたも一緒に『W・P』に入れば大丈夫」

「そんなこと、できるのか？」

「できるわ。わたしは、『W・P』から直接招かれたから。あなたの実力を証明できれば

簡単よ」

その後、グレイスから色々聞いた事によれば、

『W・P』^{ダブルピー}とはworld peace、すなわち世界平和という言葉を略したもので、

やっていることはおもに、困っているポケモンの手助けをしたり、救助をしたりと、『救助隊』や『探検隊』と呼ばれる者たちと同じようなことしているらしい。

ただ、一つ他とは違うことは、その実態が明かされていないということだ。

どこにあるのか、どれだけの人が所属しているのか、知っている者は少ない。

さらに、かなり難易度の高い依頼も多く取り扱っているとか。

依頼をする人は、W・P宛と書いた手紙を配達人のデリバードに渡せば、勝手に届けてくれるそうさ。

話の中でフルには一つ気になることがあった。

「ところで、なんで招かれたんだ？」

「実はね、わたしの村の長老様は『W・P』のリーダーさんと面識があるみたいで、毎年、その年の成績優秀者は直接、オファーがあるの。それでわたしが選ばれたって事」

「じゃあそれだけ実力があるってことか」

「そういうこと。でも、あのお爺さんには負けちゃったけどね」

「ライトさんのこと？あの人かなり強いよな。全然かなわなかったよ。ゲイルも強かったし」

「あの二人……何者なのかしらね。あんな強い人滅多にいないし……」

「全く想像がつかないな」

その後、二人で正体を考えてみたが、結局、答えは出なかった。

「これから旅を続けていけばきっと分かるよ。ふあゝ。色々話したら眠くなってきたわ。」

「じゃあ、わたしはそろそろ寝るわね」

「俺もそろそろ寝ようかな」

そうして、二人はそれぞれのベッドで眠りについたのだった……

第七話 敵、そしてグレイスの目的（後書き）

フル「どう？分かってくれた？」

だいたい……。面倒な事、不安要素が増えたって事でしょ。本編では言ってなかったけど。

フル「彼女の前でそんな事言えないさ」

まあ、これも試練みたいなものだ。がんばりな。

フル「そうしようかな」

第八話 道中（前書き）

一話書くのに結構時間かかる……

週一が限界か…

もっと早くできるようにしなければ

第八話 道中

朝早くから宿を出発したフールたちは、『W・P』ダブリューピーに向かうため森の中を歩いてきた。新たにライトとゲイルが加わったことで、フールに乗って一気に飛んで行くことは出来なくなっただが、急ぐ必要はない旅なので、フールも地上に降りて歩いている。

一方、もう一人の飛行タイプであるゲイルは、相変わらずライトの背中の木にとまっている。というか、

「……………あれ、寝てるよな……………」

木にとまったまま全く動かないゲイルを見たフールは、隣で歩いているゲイスに話しかける。

「そ…、そうみたいね……………。よくあんな所で……………」

フールに話しかけられ、ゲイルの姿を見たゲイスは言う。

いつもあんな感じなのだろうか。ライトは平気そうに歩いている。さすが、あれほどのバトルが出来るだけあって、歳の割に相当の力があるようだ。いや、ゲイルの体重が軽いだけかもしれない。ホーホーの平均体重は20kgくらいだから……………、

そんなことはどうでもいいか……………

そんな事よりもまずは、あの二人の正体を探ることが優先だ。このことにゲイスは賛成していないが、フールはあの二人の事が気になつて仕方がなかった。どうしても、二人の事が頭から離れないのだ。この感覚は、自分の失われた過去から来る物なのだろうか、それともただの気のせいなのか、答えは見つからなかった。

思い出せそうで思い出せない記憶、一体自分はどうして記憶を失っ

たんだ？

「それはそうと、ここから近い『パルス村』まで、一時間ほど歩けば着きそうよ」

グレイスの声で、フルは自分の世界から引き戻される。

「ああ、そうか……。ところで、ライトさんたちは大丈夫か？さっきから歩きっぱなしだけど」

フルは後ろのほうにいる二人に尋ねる。

「わしらは大丈夫じゃぞ」

見たところ、ライトはまだまだ大丈夫そうだった。それを確認したフルは、隣のグレイスに
ライトに聞こえない程度の声で話しかける。

「ほんとすごいよな、あの体力」

「まあ、あれだけ歳をとっているんだから、それなりに経験をつんでいるんでしょうね」

「そういえば、ライトさん達にこの旅の目的を説明したのか？『W・P』とか言うのに

入るんだったら、途中で別れなきゃいけないってことだろ。そういうことも今のうちに

説明しておいたほうがいいと思うけど」

「そういえばそうだったわね。じゃあ、適当に休憩をとって、そのときに話そうかしら」

そうして、少し歩いていった所で、

「この辺で休憩にするわ！」

そこは、少し開けた場所で道から少し離れた所だった。

「じゃあ、今からあなた達二人にこの旅の目的を説明するわね」

寝ていたゲイルを起こし、グレイスは話し始める。

自分が『W・P』に向かっていること、『W・P』から招かれた事、途中で出会ったフルも一緒に『W・P』に入る事など、すべての事を話した。

途中でゲイルはまた眠ってしまったが……。

話が終わり、ライトが口を開く、

「なるほど。そんな事情があったのか。それで、『W・P』とやらはいつたいどこにあるんじゃ？」

そんな事を聞かれてグレイスは言っているのか迷ったが、

「旅の仲間なんだから、それくらいの事は教えてもいいんじゃないか？てか、俺も聞いてないし」

と、フルに言われ、

「『W・P』は、ここからさらに一週間ほど南に歩いた所にある」

光の森』というところにあるわ。このことはあまり人には知られて
い事なの。尚且つ、出来るだけ隠しておきたい事みたいだら、あま
り他の人には言わないでね」

「ほう、『光の森』。たしか、その近くに『精霊の滝』という滝が
あったはずじゃ。どうせそこまで行くのなら、わしらはそれを見に
行ってみようかの」

いきなり、のんきな事を言い始めたライトにグレイスは驚きの声を
上げる、

「えっ、そんな観光気分の旅をして大丈夫なの？」

お前が言うな。と、おとといは完全に観光気分だったグレイスに対
して、フルはそう思ったが

いちいち突っ込むのも馬鹿馬鹿しくなったので、そっとしておくこ
とにした。

「大丈夫じゃよ。わしらは、もともと当てのない旅を続けてきたん
じゃ。少しの間でもにぎやかに旅が出来るだけで十分だと思ってお
る」

「そう……。フルはどう思ってるの？」

「俺は……」

フルは思った。まだ正体の分かっていない二人と旅を続ける事は
危険があるかも知れない。でももしここで別れたりしたら二人の正
体を知る機会がなくなってしまう。

結局、強かったのは好奇心の方だった。

「俺は、二人がそうしたいと言っているんだからいいと思うけど」

「そう？ほんとにいいの？」

「いいよ」

「だったら……、私から一つ条件があるわ」
「ほう、その条件とは？」

「簡単な事よ。私たちの旅に協力してほしいの。これから先、私たちだけでは到底乗り越える事のできない困難が立ちふさがるかもしれないわ。だから、その時は力を貸してほしいという事よ」

「なんじゃ、本当に簡単な事ではないか。わしらの力でよければ、喜んで協力しよう」

「じゃあ決まりね。そろそろ出発しようかしら。あと一時間ほどで『パルス村』よ」

「一時間ほどで着くんじゃったら、まだまだ余裕じゃな」

全員が出発しようとしたそのとき、近くの草むらから何かが飛び出した。

「お前ら！痛い目に合いたくなかったら、持ち物を置いてとっとと失せろ！」

その、草むらから飛び出してきたグラエナが叫んだ。

突然の事にフル達は呆気にとられていたが、

「お前、正気かよ。こっちは四人、そんなに実力にあるのか？」

「うるさい！つべこべ言わずに言うとおりにしやがれ！」

「やれやれ。最近の若者は礼儀というものを知らぬようじゃのう。さて、そうゆう奴はわしが懲らしめてやろうかの」

「けっ、老いぼれが！俺をなめてかかると痛い目見るぞ」

「老いぼれで悪かったの。わしらは忙しいんじゃ、用がないのなら帰ってくれんかの」

「ちっ、言っても聞かないか。こうなったら実力行使だ！いくぜ、

かみくたく!」

グラエナはライトに攻撃しようと飛び掛るが、

「なっ、いない?」

「どこを見ておる。だから最近の若者は……。お前なんぞ、これで十分じゃ。はっぱカッター」

後ろから、葉っぱカッターの直撃を受けたグラエナは、軽々と飛ばされ近くにあつた木に激突した。

「どうじゃ?まだやるかね」

「くっ……。お、覚えてろよ!」

葉っぱカッターのあまりにも大きい威力に勝ち目はないと思つたのか、グラエナはそう言つて森の中に消えていった。

「一件落着じゃな。さあ、出発しようかの」

「相変わらず速いな……」

あまりの速さにフルとグレイスは驚くばかりだった。

その後の道中は、休憩の前と比べると会話も多くなかなり賑やかだつ

た。

「へ、それでライトさんはいつからこの旅を？」

「確か、一年ほど前からかの。特に目的なんてなかったのじゃが、気付いたら一年もたっておつてのう」

「一年もか……。ところで、ゲイルとはいつ出会ったんだ？」

「いつごろじゃったかのう、ほんの十数年前だった気がするんじゃないが」

「それにしても、ライトさんは彼ととても仲がよさそうですね」

「彼とは気が合うみたいだな」

ライトは、あの騒動の中でも目を覚まさなかったゲイルを見て言った。

「というか、どうやってたらこんなに眠れるのか不思議だ。ここまでくると、もはや神の領域だ。」

「昨日の夜はきちんと寝れたのだろうか。」

結局、次の村に着くまでゲイルは起きなかった。

第八話 道中（後書き）

フル「あのグラエナたいした事なかったな」

.....

フル「ん？どうした？」

.....今週ずっと12時以降就寝で.....眠い

フル「それはそれは、お疲れさん。で、原稿が全然出来上がってないのはなぜかな？」

.....ちょっと他にもいろいろとあつて（汗）

フル「どうせどうでもいい事だろ！」

あつ.....ちょっと、冷気が.....気が.....遠く.....なっ.....て.....

フル「よし。作者もこれでゆっくり眠れるな」

つて、俺を殺す気が！

第九話 電気タイプの村（前書き）

今回も新キャラが……

そして、ゲイルの目はいつ覚めるのか……！？

第九話 電気タイプの村

「は」

ため息をつきながら手にしたじょうろで花壇の花に水をあげているのは、タツベイ。

彼の名前はタツ。ここ、電気タイプの村と呼ばれる『パルス村』に住んでいる。

彼は悩んでいた。周囲から向けられる冷ややかな視線。

ここへ来て以来ずっとこの調子だ。彼は、ずっと一人ぼっち。おそらくこの先も、ずっと……

「いやあ、よくぞいらっしやいました。私たちは歓迎しますよ！」

グラエナの襲撃から一時間ほどかけて、フルル達は『パルス村』に

到着していた。

到着してすぐ、彼らはライドと名乗るデンリュウに話しかけられた。彼はこの村の村長だそうだ。

村長の割には見た目が若くとてもそうには見えなかった。さらに、フリーザーがいる事についてもあまり驚いていないようだ。

「宿にはお泊りになりますか？お泊りになるのなら案内しますけど」「いや、そんな気を遣わなくても大丈夫です。わたしたちは自分達で何とかするので」

「そうですね。では、とりあえず村長としてこの村の案内だけでもさせていただけませんか？」

フル達は、特に急ぐ用事もなかったため案内してもらおう事にした。

それから数十分ほど案内は終わった。『パルス村』は村という割には結構広く、ある程度の設備がそろっていて町といってもいいくらいだ。

案内が終わった場所は村の一番端だった。そこは建物が少なく、誰かが住んでるとは思えない家が一軒だけ建っている非常に殺風景な場所、

「さて、最後に質問したい事とがありますか？」

ライドのその言葉にフルは尋ねる、

「ここは見たところでんきタイプばかりだけど、どうしてだ？」

「やっぱりその事ですか。ここにはでんきタイプのポケモンが好む磁場のようなものがあるようで、それで気付いたらでんきタイプのポケモン達がたくさん来ていたんです。」

「そういうことだったのか。分かった」

「あなたもやっぱりその質問をするんですね。昔ここに来た旅人達はいつもその質問をしました」

その言葉に疑問を覚えたグレイスはすかさずライドに質問した、

「昔？最近あまり来ないの？」

「はい。ここ数年は村の唯一の道にどこからかやってきたグラエナが現われるようになって、旅人たちから持ち物を強奪するという事件が起こり始めたんですよ。あるとき、腕に自信がある者たちがそのグラエナを退治しようとしたんですが、全員やられちゃって……。それ以来あの道を通る者はいなくなってしまった、というわけです。……あれ？そういうえば、あなた達グラエナに会わなかったんですか？」

それを聞いた三人（寝ているゲイルを除く）は気まずそうな顔をする。

「会ったは会ったんだけど……、それが……」

「わしがちょっとばかり懲らしめてやったんじゃ」

その言葉にライドは驚く、

「ええっ！あなたが？あのグラエナを？……これはぜひともお礼をさせていただかなければ」

「いやいや。いいんじゃないよそんなお礼なんて」

「いや、ぜひとも！」

その時、フルはぼつんと立っている家から一匹のタツベイが出てくるのを見た。

「え？あれってドラゴンタイプのタツベイだよな。どうしてこんな所に？」

その言葉を聞いたライドは、ライトとの話をやめフルのところまで来る。

「ああ、彼ですか。彼はこの村唯一のでんきタイプ以外のポケモンですよ」

そのタツベイに向けられたライドの視線はなんだか冷たく感じられた。

「そんな事より、あなたたちはこの村を救ってくれたんです。お礼をしないなんて出来ません！」

「仕方ないのう」

「じゃあ、村人総出でお礼のパーティを開くので少しお待ちを」

そう言ってライドはどこかへ走っていった。

「パーティを開くんだっいたら出発できるのは明日になりそうね。ひとまず今日はさっき見た宿にでも泊まるうかしら」

「そうじゃな。暗い中移動するのは危険だろうしの」

そうして、二人は宿のほうに向かおうとするが、

「フル？」

フルだけはあのタツベイを見たまま動かなかった。

「どうしたの？」

「……ちよつと、あのタツベイが気になって……。少し話してきてもいいか？」

「えっ？どうして……」

グレイスが尋ねようとしたが、ライトがそれを遮る。かきと

「分かった。わしらは宿にいるからの。ゆっくり話してくるといい」

「ライトさん……」

「ありがとう」

フルはタツベイのもとへ歩いた。

(ライドが向けたあの視線、なんだったんだらうか)

そのころそのタツベイは、いつも通り花壇の花にじょうろで水をあげていた。そのことに夢中だったのかすぐ後ろに立っていたフルに気付いていなかった。

「あの……」

「うわっ!」

突然後ろから話しかけられたタツベイは案の定、驚いて飛び上がる。

「すまない。大丈夫か」

フルはすっ転んでしまったタツベイに手、ではなく翼を差し出す。

「あっ、すみません。僕の不注意で……、ってええ！フ、フリーザー！？」

「そうだけど……」

彼は始めて見る伝説のポケモンに驚いているようだ。

「どうしてこんなところにフリーザーが？」

「まあ、ちよと旅をしていて、途中で立ち寄ったってとこだな。俺の名前はフルだよろしくな」

「僕の名前はタツ。こちらこそよろしく」

お互いに自己紹介を終えたところでタツがきよろきよろと周りを見始めた。

「どうしたんだ？」

「話は家の中でしょう」

そう言われたのでフルは家に入ることに。

ボロい外見とは違い、家の中は意外ときれいだった。しっかりと整理された家具、清潔感のあるキッチン、そして決して派手すぎず、地味でもない部屋全体の雰囲気。見事だ。

「フルさんが僕のもとに訪ねて来られたのには何か訳があるので

しょう」

「その通り。どうして電気タイプの村と呼ばれることに、ドラゴンタイプの君がいるんだ？」

その質問に顔を曇らせるタツ、

「あ……、悪い。聞かない方がよかったかな」

「いいんです。せつかく久しぶりに来てくれたお客さんなんですから、全てお話ししましょう。」

僕が昔住んでいた所は争いの絶えない危険な場所でした。そのせいで、僕は両親を失いました。そんな僕を『W・P』はこの村で暮らせるようにしてくれました」

「『W・P』が？どうして君を？」

「僕の両親は昔、『W・P』で働いていたんです。だからそうしてもらえたんだと思います」

これは驚きだ。こんな所で『W・P』の話が出るとは。

「でも、この村はでんきタイプばかり。ドラゴンタイプの僕はいつしか、みんなから遠ざけられるようになって……」

だから村長はあんな視線を……。差別ってやつか。

「まあ、こんなところですよ。何かききたい事とかある？」

その後、フルは『W・P』について色々と質問したが、新しい事は聞けなかった。

その帰り際、

「最後に一ついいか？」

「なんですか？」

「君はこの村に自分を連れてきた『W・P』を恨んでいるのか？」

「そんなの、恨んでいないに決まってるじゃないですか。あの組織はすばらしいところですよ。僕も強くなったら『W・P』に入ろうと思ってますから」

「そうか、そういえば村人達がパーティを開くとか言ってたから君も来るといいよ。じゃあな」

「気が向いたら……。じゃあね」

フルが宿に着いた頃にはすでにパーティは始まっていた。だが、そのパーティにタツが来る事は無かった。

その夜、
『パルス村』のちよつど裏にある山の中腹にある小さな洞窟にて。

「……マシンの守りは任せたぞ……」

喋っているのはメタグロス、そしてその相手は……

「「「「了解!」「」「」

喋っているポケモンと同じ姿が四つ、そう四匹のメタグロスだった

……

第九話 電気タイプの村（後書き）

てなわけで、新キャラが二人も登場しました。

ゲイル「ふーん。新キャラの前に僕のセリフを考えようね！」

セリフなしで早くも空気状態（笑）

ゲイル「次も空気状態だったらただじゃおかないからね。覚悟しておいてよ」

うっ……！ものすごい殺気を感じる……！

第十話 語りかける者（前書き）

いろいろあって二週間も遅れてしまいました。
読者の皆さん、本当に申し訳ありません。
と言う訳で、今回は長め(?)です。
では、どうぞー！

第十話 語りかける者

その異変が起きたのは次の日の朝だった。

「おはよ〜。あれ？どうしたの？」

グレイスが起きてきた時、フルルは部屋の窓から外を見ていた。気になったグレイスは、フルルと同じように窓の外を見る。

「どうかした〜？」

「今、何時だ？」

「え〜と、八時くらいだけど……。それがどうかした？」

「気付かないのか？村人が一人も見当たらない」

フルルに言われてグレイスはようやく気付いたようだ。彼の言う通りこの時間にしては外には誰もいなかった。

「いったいどうなってるの？」

「分からない。ひとまずライトさん達を起こしに」

「その必要は無いと思うがのう」

その通り。その必要は無かったようだ。振り向くと、そこにはライトとゲイル（珍しく起きている）がいた。

「わしらも今、外を見てきた。村中のポケモンが気を失っているよ
うじゃ
うじゃ」

「原因は分かったの？」

グレイスの質問に対して、ゲイル（久々に喋れた！）が答える。

「まだ分からない。でも不思議なのは、どうして僕達が大丈夫なのかということ。もし、ウイルスか何かだったら僕達もまずいと思うんだけど……」

「そう考えてみると、むしろには影響が無いということになるがのう。この村のポケモンにだけ影響があるとなると……」

フルは思い出した。昨日ゆうライドが言っていた事を

ここにはでんきタイプのポケモンが好む磁場のようなものがああるようである……

「……磁場。そうか、磁場だ！でんきタイプにだけ影響を及およぼすものといったらそれしかない！」

「たしかにそれじゃったら話の辻つじ褻まがあう。しかし、いったいどうしてこんな事になったんじゃ？」

それだけは一切いっさい分からなかった。

「どちらにしろ何か原因があるはずだ。とりあえず、外へ出て原因調べないと」

「そうするしかないわね」

彼らは外へ出たものの、いったいどうすればいいのか悩んでいた。

そこへ……

「フルさーん」

その声の主は言うまでも無く……

「タツ！やっぱり無事だったんだな！」

「起きたら外がやけに静かだったから驚きましたよ。それで、なにがあつたんですか？」

「それが……」

フルは、これまでに話していたことをタツに教えた。

「そんなことが……。それで、この人たちがフルさんのお仲間ですか？」

「そうよ。わたしはグレイス、よろしくね」

「わしは、ライトじゃ」

「そして、僕がゲイル」

「僕はタツ。昨日フルさんと知り合いました」

一通り自己紹介が終わったところで、タツが口を開いた、

「あのく、関係があるか分かりませんが、昨日の夜に裏の山から怪しい物体が飛んで行くのを見たんですが……」

「怪しい物体？」

「はい。何かごつごつしたのが飛んでいったんです」

「それはどの辺から飛んで言ったんじゃない？」

タツは山の真ん中辺りをさして、

「あの辺です」

それを聞いたライトはゲイルに、

「どうじゃ？何か見えるか？」

「うん。洞窟みたいのが見えるよ。もしかしたら何かあるかもしれないね」

「じゃあ、とりあえずその洞窟を見に行ってみるか」

そうして彼らは、その洞窟に向かったのだった。

それから数十分後、彼らはすでに例の洞窟に到着していた。そこはかなり浅い洞窟で、異変の原因はすぐに分かった。

洞窟の突き当たりの場所、そこには、謎の機械があった。箱型で、大きめの機械。彼らにとっては始めて見る物だったが、少なくともあの装置が何かを発生させている事くらい簡単に分かるだろう。

すぐに破壊する必要があるのだが、一つ問題があった。見張りの存在だ。その機械の周りにはメタグロスが四人。数ではこちらのほうが有利だが、問題は彼　　タツのバトルの腕だ。どちらにしろ相性はライトさんを除いて全員不利。
ここはライトさんに頼るしかないな。

「さて、あのメタグロスをどうやって倒すかの。わしのじめんタイプのワザで、一気に倒すのがいいと思うんじやが」

作戦が決まったところで、とつとと突入することに。

「やて、いくぞー！」

洞窟に入った瞬間、メタグロス達はすぐにこちらに気付き、そのうち一人のメタグロスが破壊光線を放ってきた。

「おっと！」

フルはギリギリでかわした。そして、ライトが動く。

「じしん！」

だが、最初に破壊光線を放ったメタグロス以外はすでに電磁浮遊で空中に浮いていたため、地震は命中しなかった。さらに二人のメタグロスが、素早い動きでライトに近づき、

「サイコキネシス」

「ぐっ……」

二人がかりでライトを押さえつけてしまった。

残る二人はこちらへ向かってきている。

「タツ！隠れてろ！」

予想外の展開に危険だと判断したフルは、タツに隠れるように指示を出す。

「片方に攻撃を集中させる！れいとうビーム！」

「こうなったらやるしかないわ。ふぶき！」

「エアスラッシュ！」

三つの技は全て片方のメタグロスに命中するが、効果はいまひとつ。あまり効いていない様だ。

「くっ！やっぱり相性が悪いと駄目か……」

唯一、地面タイプの技を使えるライトが捕まってしまった事で、フール達が圧倒的に不利になってしまった事は確かだ。ライトはサイコネシスで押さえつけられているものの、ダメージを受けている様子は無い。

どうなっている？機械を守るのなら、さっさと自分達を戦闘不能にしまえばいいものの、奴らは攻撃してくる気配を見せない。奴らにはそんな力が無いからか、それとも……。そのとき、スピーカーでも付いていたのだろうか、あの機械から声が響く。

「……任務完了。……これより本部へと帰還する……機械および機械周辺の五人は始末……」

やっぱり時間稼ぎだったか！本当の目的はこの村に……。

「コメットパンチ」

突然の攻撃に声も無く吹き飛ばされるグレイス。そのまま壁に叩きつけられた彼女は、気を失ってしまった。

「グレイス！くっ！どうすれば……」

「地上だと不利だよ！敵の攻撃を受けない空中から攻撃をしなくちや」

ゲイルの提案で空中へと飛ばたく二人。これで奴らの攻撃を受けないと安心した彼らだったが、二人は忘れていた。

「はかいこうせん」

しまった！

最初に使ってきた技である破壊光線をフールとゲイルは忘れていたのだ。狙いはゲイル。あの圧倒的な速さを持つゲイルでも、油断していたせいか、避けきれなかった。破壊光線によって翼を負傷した彼の羽ばたきは不規則で、今にも落ちてしまいそうだ。

「ここまでか……」

「フールさん……。僕、やっぱり何も出来ない無力なポケモンなん

ですね……」

追い詰められていくフル達を見て、そう呟いた^{つぶや}

タツにはバトルの経験がない。練習をしたいと思っていたけれど、この村に来てからずっと一人だった彼には練習に付き合ってもらう人なんて、誰一人いなかった。そのため、練習のやり方すら分からず一人でやることもできなかった。

こんなピンチに、何一つ役に立つ事が出来ないことが悔しかった。その思いでタツが涙を流し始めたそのときのことだった。

「……タツ、タツ。男なんだから泣くんじゃない」

「その声は……。父さん！父さんなの！？」

タツが声のしたほうを見ると、タツより一回りも二回りも大きい体を持ったボーマンダの姿が、

「タツ、父さんの言葉をよく聞きなさい。これが父さんがお前にしてあげられる最後の事となるだろう。お前は決して無力なんかじゃない。まだその力が目覚めていないだけだ」

「どうして、そんなことが分かるの？」

「お前は父さんの子だからだよ。お前は強い。なんたって、偉大な竜の一族の子だからな」

「父さん……。ありがとう」

たぶん、こんなに気持ちのこもった「ありがとう」は今まで誰にも言ったことがないだろう。本当に嬉しかった。父さんに褒められた^ほことが。

タツが父親の方を向くと、彼の姿が揺らいだ。

「……そろそろ時間みたいだ」

「そう……。母さんに僕が元気だっことを伝えておいてね」
「分かってる。最後に、父さんと母さんからのプレゼントだ。よく考えて使っただぞ」

差し出されたのは小さなアメ。

「これは……？」

これがあの『ふしぎなアメ』というものなのか。タツは本でしか見た事がない代物に目を丸くしている。

「さらばだ、タツ。父さんと母さんはいつまでもお前を見守っているからな」

その言葉とともに、タツの父親の姿は消えていった。

『ふしぎなアメ』には食べた者の能力を最大限まで引き出すといわれる伝説のアイテムだ。
父さんはよく考えて使えといった。だが、タツには考える必要は無かった。父さんも分かっただろうか。

今こそ、これを使う時だ。

『ふしぎなアメ』を食べたその瞬間、彼の体はまばゆい光に包まれた。

あれからどのくらい奴らの攻撃を避け続けただろうか。ゲイルとフルは体中傷だらけで、もう体力は限界だった。そのときのことだ。近くにあった岩の陰からものすごい光があふれ出した。

「なんだ！」

光がおさまった後、岩の陰から出てきた姿を見てフルは眩く、

「いったい、どうなってるんだ？」

それは、威圧感いあつかんのある蒼あおい体、そして強靭きやうじんな紅あかい翼よくを持っていた。そう。ボーマンダに進化したタツの姿だった。

第十話 語りかける者（後書き）

本当は、パルス村での出来事はこの一話で終わらせるつもりだったんですが、思ったより長くなってしまい、次の話で終わらせることに……。

……急いで次の原稿を作らなきゃ。

第十一話 解決（前書き）

まずは皆さんに、三ヶ月以上も更新できなかったことを謝らなければいけません。

本当に申し訳ありません。

以後、こんなことがないように気をつけますので、皆さんよろしく
お願いします。

あと、久しぶりの執筆で、もともと酷い文章がさらに悲惨なこと
なってますが、ご了承ください。

第十一話 解決

タツがボーマンダに進化している。

フルはそのことに驚いていた。さっきまでタツベイだった彼がどうやったら二段階も進化できるのか。こんな事、ありえない。

「タツ、その体……どうしたんだ？」

「事情は後で話します。今はあのメタグロス達を倒すのが先決です」

タツはフルの様子を見ると、

「かなりダメージ受けているようですね。フルさんは少し休んでください。メタグロス達は僕が倒しますから」

「そんな無茶な！あんな強い奴をどうやって倒すって……」

「はかいこうせん」

二人が話している隙を突いてメタグロス攻撃を仕掛けてきた。狙いはフル。弱りきった彼には、もう避ける体力は残されていなかったが……

「まもる！……だから言ったでしょう。フルさんは休んでいてくださいって」

フルが話し始める間も無く、タツは破壊光線を放ったメタグロスに向かって一直線に飛んで行き……

「かみつくー！」

動けないメタグロスに噛み付いた。その攻撃に怯んだメタグロスを

確認すると、タツはさらに攻撃を繰り返す。

「まだまだ！かみくたく！ドラゴンクロー！」

強力な攻撃の連続に、ついにメタグロスが倒れた。その瞬間、メタグロスの体が消え始める。

「これは……。身代わりでしたか。となると、本体はここにはいませんね」

フルルは啞然^{あぜん}としていた。タツがあのもメタグロスをこんな短時間で倒してしまったのだ。これが彼の實力なのか……？

「せめて巻き添えを食わないようにしてくださいよ？フルルさん」

「ああ、分かってる」

全く、余裕そうじゃないか。

タツは、ライトを捕らえているメタグロスの片方に狙いを定め、

「りゅうのいぶき！」

広い洞窟内の空中から、攻撃を浴びせる。

当然、攻撃を受けたメタグロスはライトにかけていたサイコキネシスをとぎ、反撃の体勢に入る。

だが、タツはメタグロスがライトから離れたその瞬間を見逃さなかった。

「そこだ！だいもんじ！」

ここで、メタグロスに相性の良い炎タイプの技を繰り出す。だいもんじは、命中率が悪いのであえてメタグロスをライトから遠ざけて技を繰り出したのだ。

技を受けたメタグロスは力尽き、消滅する。残りはあと二体だ。その時、自由に動けるメタグロスから破壊光線が放たれた。

「まもる！」

だがタツは、その攻撃を防ぐと反動で動けないメタグロスに攻撃を加える。

「だいもんじ！」

先ほどのメタグロス同様、一撃で倒れたようだ。

「あとは、あなただけですな」

タツにそう言われたメタグロスは、飛びのくようにライトから離れた。

「逃がすか！」

だがそのメタグロスは逃げようとはしなかった。

そして、不敵な笑みを浮かべ、

「だいはくはつ」

一瞬の出来事だった。周りは煙に包まれて一切見えない。

フルは、瞬時に守るを使いダメージを受けずにすんだ。

しかし、他のみんなは？

「ふう。危ないところだった」
「お前さんのおかげで助かった」

タツとライトは無事のようにだ。グレイスとゲイルは無事だろうか。そう思って周りを見渡すと、

「こっちは大丈夫だよ」

良かった……

ゲイルもまた守るを使い、気を失ったグレイスを大爆発の衝撃から守っていた。

「終わったみたいですね」

先ほどの爆発であの機械マシンは完全に壊れていた。これで、村の人たちは安全だろう。

機械が完全に壊れていることを確認すると、フルルたちは村に戻ることに。気を失っているグレイスはタツが運んでいき、残りの三人は山道を歩いていった。山道を下っている最中、

「タツはどうしてあんな短時間で進化したんだろう？」

フルルの言葉にライトが答える。

「さあ、そうゆうことは本人に直接聞いてみるのが一番だと思うのじゃが」

「そうするか……」

村に戻ると、そこにはタツとライドの姿があった。

「ああ！皆さん！大丈夫ですか？話はそこにいるタツから聞きましたよ」

ライドの様子から村の人たちは無事のようにだった。

「そういえば、グレイスは大丈夫なのか？」

「彼女なら大丈夫ですよ。あなたたちが昨日泊まった宿で治療を受けてますから。ひとまず、皆さんも宿に行ってください。そのくらのダメーじだと一日も休めば回復はまずです」

ライドにそう促うながされて三人は宿に向かった。

十分後、宿の一室には疲労のあまり床に突っ伏して寝ている三人の姿があったとか……

翌日……

朝一番に目覚めたフルだった。

まだ寝ている二人を起こすわけにもいかず、彼は一人で宿を出た。

彼はタツの家に向かっていった。昨日のことをいろいろと聞きたかったからだ。

タツの家に着いたフルは、扉の横にあるオシャレな呼び鈴を鳴らした。

しかし、家の中から誰かが出てくる様子は無く、誰かのいる気配はなかった。

こんなに朝早くから出かけてるのかな？

仕方なく、フルは宿に戻ることに。

「フル、おはよう」

宿の前に来た途端、後ろから声をかけられた。

「グレイス！大丈夫なのか！？」

昨日はメタグロスの攻撃を受けて気絶していたはずだが、

「何言ってるのよ。あれくらいのダメージで、わたしがやられるわけ無いでしょ」

昨日は確実に気絶していたんだが……

「えっ、なに？昨日は気絶してただろ、って言った？」

言ってますせん（汗）。てか、なんで分かったんだ？
そんなことはお構いなしにグレイスは話を進めていく。

「まあいいわ。そういえば、ライトさんたちがあなたのこと探して
たわよ」

「あれ？ライトさんたち、もう起きたんだ」

「もう、って……あなた今何時だか分かってるの？」

周りを見渡せば、朝出てきた時には全くいなかった村の人たちがち
らほらと歩いていた。

どうやら、タツの家までの往復で思っていた以上に時間がかかって
いたようだ。

「まったく、あなたは何をやっているのか……」

今日のグレイスはなんだか愚痴が多い。

そうこうしているうちに、宿からライトたちが出てきた。

「なんだか楽しそうなことをしておるのう」

「朝から何やってるだらうね」

ライトとゲイルが来たのにもかかわらず、グレイスの愚痴は止まら
ない。

「大体昨日は……」

「ちょっとライトさん、助けて（涙）」

数十分後、ライトとゲイルの説得によってグレイスの異常行動はお
さまったという。

落ち着いたグレイスはライトに任せ、フルは再びタツの家を訪れていた。

案の定、家にタツはいなかった。しかし、また戻るのもアレなのでこんどは待つてみることにした。

近くでは子供が遊んでいて、昨日の事件が嘘のようだ。

しばらく待っているとお上から力強い音が聞こえてきた。彼もこちらに気づいたようだ。音の主はこちらに近づいてきた。

「フルさん。体は大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。そんなことより……」

フルが質問しようとしたそのとき、

「言うことをききなさい！」

突然聞こえてきた声に驚き、二人が声のしたほうへ振り向くと、そこにはさつきまで遊んでいたラクライとその母親らしきライボルトがいた。

関係ないことだろうと思い、再びタツの方を向き話を続けようとするが、またしても声が聞こえてきた。

「危ないから近づいたらいけません！食べられたりしたらどうするの!？」

食べられる? いったいなんのことだろう?

フルが再び振り向く。それと同時に何か羽ばたく音が聞こえた。

「え? タツ? 何を……」

フルルが言い終わる前にタツは飛び去ってしまった。
いったいどうなってるんだ？
仕方なくフルルも飛んでタツの後を追う。

「やっと追いついた……」

タツを追っていたフルルは、山の西側の高台にいる彼を見つけそこに降り立った。

フルルの声に、彼は驚いたようにこちらを見る。

「フルルさん！？どうかしたんですか？」

「それはこっちのセリフだよ。タツこそどうしたんだ？」

話している最中にいきなり飛び去っていくなんて、どうかしてる。

「いいえ、何でもありませんよ。ちょっとここに来たかっただけです」

「じゃあその涙はどう説明するんだ？」

タツの目には少しだけだが涙が溜まっていた。

「えっ！？あっ！これは、その……」

「タツ、どうして教えてくれないんだ？初めて会ったときは君のことをすべて教えてくれたのに……」

その言葉にタツは俯き、そして……

「……やっぱり、こういうことは誰かに相談したほうがいいですね。どうしてもっと早く気がつかなかつたんだろっ……」

タツは涙を拭い話し始める。

「僕がこの村で他の人たちから遠ざけられているのは知っていますよね。僕がドラゴンタイプだからという理由で。だから、僕は今まで村の人とはかかわらないようにしてきました。特に子供は怖がらせてしまいかもしれないので」

ここまでの話なら、前に彼から聞いたことでだいたい分かる。

「それで、僕は思ったんです。今の姿でこうなんだから、進化したら子供だけではなく村の人たち全員に怖がられてしまうんじゃないかと」

確かに、理屈ではそういうことになる。

「だから、僕は進化を拒み続けながらこの村で長い間過ごしてきました」

「なるほど、昨日タツベイからボーマンダに一気に進化したのはそのためか」

「いいえ、それだけではありません……」

タツは昨日自分が体験したことをフルに説明した。

「ということは、その不思議なアメのおかげで進化できたということ」

とか」

強力な力を持つアイテムなら、そんなことが起こってもおかしくはない。進化を拒み続けてきたのならなおさらだ。

「はい。話を戻しますが、問題は村に戻ってからどう生活していくかです。この姿だと、みんなから怖がられても仕方がない。さつきも見たでしょう、あの親子を」

確かそうだった気がしないでもないが……怖がってたのは子供ではなく、母親のほうだった気が……

「前までは、耐えることが出来たけど今はもう耐え切れない。もうこんな村なんか……」

「タツ、何か勘違いしてないか？」

「えっ？それはどういう意味？」

「だから、村の人全員が本当にタツのことを怖がってるとは限らないって事だよ」

「でも、さつきの親子は……」

「さつき怖がってたのは、母親だけだったように見えたけど。むしろ子供の方は自ら近づいてきてるようだったな」

フルルのその言葉にタツは戸惑っているようだ。

「まあ、すこし考え直すといいよ。俺はそろそろ帰るから」

そう言って、フルルは村へと飛んでいった。

その後もタツは、その場から離れずフルルの言葉について考えてい

た。

すると、後ろの草むらで何か動く気配がした。

「誰!?!」

少しして、草むらから出てきたのはライトだった。

「ライトさん、どうしてここに?」

「いやあ、少し道に迷ってしまったの。お前さんこそこんなところで何をやっとするんじゃ?」

「少し考え事を……」

タツは、この人ならいいアドバイスをくれるかもしれない思ったが、なんと言おうか迷っていた。するとライトが口を開いた。

「お前さんは昨日、不思議なアメを使ったじゃろ」

「えっ!?!?どうしてそれを?」

いきなりライトがそんなことを言われ、驚くタツ。それは無理もない。昨日のことは今さっき村へ戻っていったフルにしか話していないはずだからだ。

「あの状況で進化したことを考えると、それくらいしか方法はないからの。しかし、あんな珍しい物をどこで手にいれたんじゃ?」

さすがはライトさんだ。ただ者ではない。あの状況でそこまで見抜いてしまうとは。タツは、彼にも話して大丈夫だと思い、昨日のことと自分の事をすべて話した。ライトはタツの話を口を挟むことなく聞いていた。

話をすべて聞き終わるとライトはすぐに話し始めた。

「わしから言える事はひとつ。お前さんはいつまでも閉じこもってないで、もっと周りを見渡す必要があると思うのじゃ。そのためにまずはこの村の人たちと積極的に関わり、皆が自分の事をどう思っているのか知るんじゃ。そうすれば自分のやるべきことが分かってくるじゃろう」

それを聞いたタツは俯うつむいていてまだ迷っているようだった。その様子を見てライトは、

「怖がってはいいつまでたっても真実を知ることにはできないんじやよ。わしは、お前さんの父がこの壁を乗り越えさせるために、お前さんを進化させたんじゃないかと思っておる。しっかり、進化して強くなったことを彼に見せ付ける必要があるんじゃないかね」

ようやく顔をあげた彼の雰囲気はさっきまでとは違っていた。彼がまた少し成長した瞬間だった。

「ライトさん、ありがとうございます。僕やってみます」

「そうじゃ、そのいきじゃ。がんばるんじゃぞ」

タツはライトに向かって頭を下げると、村に向かって飛んでいった。

「これで彼はもう大丈夫じゃろう」

一人高台に立っているライトはそう呟つぶやいた。

村に戻ったタツは村にある公園の草むらに隠れていた。別に、公園で遊んでいる子供に興味があるわけではない。ついさっきライトに言われた事を確かめにきたのだ。

そして、タツは草むらから出てゆっくりと子供たちの所へ歩き出す。少し歩いた所で、公園で遊んでいたコリンクがこちらに気づいた。タツは、そのコリンクがどんな反応をするのかと不安になり目を閉じる。

タツが目を開くと彼のすぐ前にコリンクがいた。

「お兄ちゃん、一緒にあそぼ！」

コリンクのその言葉にタツは目を見張った。

翌日、村の門にフル、グレイス、ライト、ゲイルの四人はいた。見送りにきたライドとタツもいる。

「本当に俺たちについてこなくてもいいのか？」

「ええ、いいですよ」

フルからの問いかけに、タツは答えた。

タツはライトとの会話の後、村の子供たちと日が沈むまで遊んでいたそう。そのことから、その子供たちの親とも親しくなったらしい。

「なにはともあれ、タツが村の人たちと仲良くなれてよかったよ」

フルが安心したように言う。その言葉にタツは笑みを浮かべる。

「ところで、この村に残ってこれからどう過ごすんだ？」

「僕は……」

昨日考えた事を言う。

「僕は、この村の人たちを守りたい。この前のメタグロスのような奴から」

よく考えてみれば、フルさんや、ライトさんの言っていたことは全部正しかった。そして、ライトさんの言っていたように自分のやるべきこと。この村を守るといふ答えを導き出すことが出来た。

「皆さん、本当にありがとうございます」

タツは四人に向かって深々と頭を下げた。

「なに言ってるんだよ。ここまでやれたのはタツががんばったから
る」

「そうよ、わたしたちはむしろあなたに助けられたほうなんだから」

タツはその言葉に照れたように顔を赤らめる。

「さて、そろそろ出発しようかの」

「フルさん、グレイスさん。待っててくださいよ。僕のW・Pに入る夢はまだ諦めてませんからね。いつかきつと叶えて見せますから！」

「ああ、待ってる」

「楽しみにしてるわ」

そうして彼ら四人はパルス村を出発していったのであった。

『お兄ちゃん。タツお兄ちゃん、遊ぼうよ』

その声を聞いてひとつの家からボーマンダが出てくる。

彼の名前はタツ。ここ、電気タイプの村と呼ばれる『パルス村』に住んでいる。

家から出た瞬間、たくさんの子供たちに取り囲まれてしまった。

『遊ぼう！遊ぼう！』

あの日以来ずっとこの調子だ。彼はたくさんの人たちから信頼されている。おそらくこの先も、ずっと……

「よし！今日は何して遊ぼうか！」

第十一話 解決（後書き）

なんか今回の話はだらだら書いていて、かなり長くなってしまいました。

フル「ところで、あのメタグロスの目的はなんだったのさ？」

それは、次回で分かるでしょう。

フル「次は早く書けよな」

そんな目で睨まないでください（汗）

第十二話 敵の動き（前書き）

今回は敵の動きについてのみです。

フル「え？俺は？」

出番なしですね。

そして新キャラを登場させていたり……

第十二話 敵の動き

他の部屋とは違った、一段と豪華な装飾のしてある扉の前にそのポケモンはいた。

緑色の大きな体をしたポケモン。バンギラスのヴァンだ。

彼が扉をノックすると、扉は勝手に開いた。その部屋はとても暗く、意外と広い室内の奥のほうは全く見えなかった。

「失礼いたします」

そう言つて、彼が部屋へ入ると部屋の奥で何かが動く気配がした。しかし、部屋が暗いせいでその姿を確認することは出来ない。

「報告に参りました」

その言葉に部屋の奥の何かがこちらを向く。

「報告を聞こう……」

「アジトの建設は順調です。作戦の方も順調ですが……」

「何か問題でも？」

「はい。W・Pの邪魔が……」

「やはりそうですね、それは仕方ありません。そちらに戦力を送るわけにもいかないのです、出来る限りそちらの戦力で努力してください」

「それと、少し気がかりがありますが」

「なんです」

ヴァンはフルについて今まで起こったことを説明する。

「……それは非常にまずいですね……」
「どういたしましょうか」

部屋の奥にいる何かは少し考えるように黙り込むとヴァンに向かって話し始める。

「最善の手としては、早いうちに始末するのが一番ですが……私やあなたが行く記憶が戻る引き金になってしまうかもしれません」
「では、どうすれば……」

「簡単なことです。彼が会ったことのない人物を送り込めばいいだけの話です」
「なるほど」

ヴァンはその言葉に納得したようにうなずいた。

「送り込むメンバーは私が決めます。決まり次第フルの始末に向かわせましょう。あなたは現在の作戦を続けてください」
「分かりました」

ヴァンはその部屋から出ていこうとするが、何かを思い出したように振り返る。

「トロイの処遇についてはどういたしますか？」
返事はすぐに返ってきた。

「今回の件は、私の力不足が原因です。彼のことは大目に見てあげましょう」

「ありがとうございます。では、失礼いたします」

そう言って、ヴァンは部屋から出て行った。

ヴァンが廊下を歩いてしていると前からメタグロスが歩いてきた。

「久しぶりですね。あなたも報告ですか？」

ヴァンはそのメタグロスに話しかける。

「……久しぶりだな……ヴァン。ついさっき任務から戻ってきたから……ボスに報告に来た……」

そして、そのメタグロスはヴァンが来た方向、さっきの部屋へ歩いていった。

「やはり一息つくときは紅茶に限りますね」

報告から戻ってきたヴァンは休憩室にて紅茶を飲みながらくつろい

でいた。

休憩室には彼以外誰もいなかった。

しばらくすると、休憩室に一匹のイーフィが入ってきた。

そのイーフィはヴァンの姿を見つけるなり、彼に話しかける。

「あら、ヴァンじゃない。久しぶりね」

ヴァンはそのイーフィを見るなり、「あなたですか……」とつぶやき、

「久しぶりですね。フィア。そこに座りますか？」

そう言って、自分の向かい側の椅子を指す。

「ありがとうございます」

フィアと呼ばれたイーフィは、そう言ってヒョイと椅子にジャンプしてそこに座った。

「紅茶でもどうですか？」

椅子に座ったフィアに紅茶を勧める。

するとフィアは、

「わたしは紅茶が嫌いだって、前にも言わなかった？」

呆れたようにそれを断った。

「あなたがここに来るなんて、なんかあったの？」

「ああそれがですね……」

ヴァンが話し始めようとすると、また誰かが部屋に入ってきた。

「……なんだ、エンジンか。あなたがここに来るなんて珍しいわね。普段なら研究室に閉じこもってるのに」

それは、さっきのメタグロスだった。

「……ヴァンなら、ここに来ると思った……。何か報告していたが……どうした？」

「ちょうどいいですね。それを今から話そうとしていました」

ヴァンは少し残っている紅茶を飲みきってから話し始める。

「あなたたちはフルと言う名前を聞いたことがないですか？」

その質問にフィアが首を傾げる。

「だれそれ？聞いたことないわ。エンジンは？」

「前に一度……会ったことがある……」

その言葉にヴァンは頷いて話を続ける。

「確かにあなたは会いましたね。本当に昔の事ですが……。今回の事は彼が原因なのです」

「ねえ、さっきから何の話をしてるのよ」

勝手に話を進めるヴァンに、苛立ったようにフィアが質問する。その質問に答えたのはヴァンではなく、エンジンだった。

「……フリーザーだ。十年ほど前に、ボスに始末されたと聞いたが……」
「その通りです。彼は、私たちの組織に甚じんだい大な被害を与え、その後ボスに始末されました。私たちに歯向かった故の当然の運命です。……しかし、彼は今になって姿を現しました。どうやったかは知りませんが、蘇よみがえったのです」
「……それってかなりヤバイじゃん」

フィアはさつきとは比べ物にならないくらい真剣な顔つきでそうつぶやく。

「そうです。しかし今はまだ心配する必要はありません」

「どうして？そんな危険な奴がうるついているのよ！もしかしたら、またここに来るかも知れないじゃない！」

かなり動揺しているフィアに比べて、ヴァンとエンジは落ち着いていた。

「……ここに来るんだったら……もう来ている……」

「えっ？」

「そうですよ。私がここに来るまでかなり時間がかかりますが、彼は飛ぶことができるのですよ。彼が来るなら一直線にここまで来ているはずですよ」

その言葉にフィアは納得したようだ。

「じゃあ、何でここまで来ないの？」

「どうやら彼は記憶を失っているようです。理由は分かりませんが……」

少し間を置いてエンジが口を開いた。

「…フリーザーになら、二日ほど前に会った……」

そう言った途端^{とたん}他の二人の視線がエンジに集まる。

「それは……本当ですか……?」

「どこで会ったの?」

「……任務のときだ。パルス村の地下迷路で雷鳥石^{らいちょうせき}を手に入れるときに、電磁波を使い、地下迷路に入ったのだが…そのとき、電気タ
イプ以外の奴で邪魔をしてきた五人がいた……その中に……」

「雷鳥石?電磁波?いったい何のことなの?」

さまざまな言葉が出てきて、ファイアは混乱しているようだ。
そんなファイアにヴァンが説明を付け加える。

「雷鳥石は伝説のポケモン、サンダーの力を司る石^{つがねい}だと言われている。パルス村には、それから発せられる電磁波によって電気タイプのポケモンが集まってくるそうです。それはそうと、そのことを
ボスに報告しましたか?」

「……ああ。さっきの報告で……そういえば、今晚、会議室に来る
ようにとファイアに伝えるように言われた……」

「ちよつと!それ早く言つてよ!いま何時?ああ、もうこんな時間
!ちよつと準備しなくちゃいけないのに!」

慌てて休憩室から出て行くこととするファイアに向かってエンジが声を

かける。

「…それと、キセルにも伝えろと……」

それを聞いた途端、ファイが不愉快そうな顔をする。

「あの新人を？あいつ、気に入らないのよね……」

そうつぶやいて部屋から出て行った。

「さて、私もそろそろ帰りますか。帰って書類の整理をしなければいけませんし。あなたもまだ作業が残っているでしょう」

「ああ……そうだった……」

そして二人も休憩室から出て行った。

その日の夜。

森の中を歩く二人の影があった。

「まったく……。なんであなたなんかと任務なのよ」

「まあ、そんなこと言わないでくださいよ。センパイ」

「あつゝ！イラつく！」

その会話が、森の中で眠っているポケモンたちの耳に届くことはなかった。

第十二話 敵の動き（後書き）

今回の話はパルス村のまとめみたいにしてみました。
まあ、謎のアイテムとか謎の人物とか

……謎は増えるばかりですね

フル「いつまで謎を増やすのさ」

さあ、まだまだ増えるかもね
パルス村の事みたいにすぐ解けるやつとか、最後まで解けないやつ
とか、たくさん作るつもりだよ

フル「おいおい（汗）」

第十三話 W・Pに向かって（前書き）

今回は、短めです。

そして、『彼』が再登場します。

『彼』が誰かって？それは読んでからのお楽しみです。

では、ごきげん

第十三話 W・Pに向かって

ここはパルス村から西へ2時間ほど歩いた森の中。
そこに、フールたちはいた。

「えーと、この地図によると、このまま歩いていけば光の森に着く
みたいね」

そんなことを言いながらグレイスは地図を見ている。

「……………」

一方、フールはグレイスのそんな言葉に耳を傾けようとしなない。

「あら、どうしたの？何か怒ってる？」

「当たり前だ……………」

……………彼が怒るのは当たり前だった。

グレイスはフールの頭の上で地図を広げているからだ。彼女はフールの背中にしがみつき、頭の上に広げられた地図を見ていた。さすがに無理しすぎだ。地図が見たいなら止まって見ればいいのだが、何を考えたのかフールの頭の上で見るという結論に至ったらしい。おかげでフールは、前のめりのまま歩くというもはやフリーザーを超えた芸等を披露するハメになっていた。

「あゝ分かった分かった」

お怒りのフールの様子にグレイスは渋々、地図をたたみフールの背中から降りる。

そんな二人の様子を見て、ライトとゲイルは、

「仲がいいのお〜」

「そうだね〜」

ゲイルはどこから持ってきたのか、木の実を食べながらのん気に眺めていた。

「ところで、あとどれくらい歩けばいいんだ？」

フルルはようやく頭の上から降りてくれたグレイスに尋ねる。

「えーと、あと……5日ってところかしら」

その答えにフルルは不満の声を漏らす。まあ、誰だって5日も歩くなんて言われたらそうなるだろう。

「大丈夫よ、休憩の時間とかも考えての時間だから」

グレイスは、そんな事どうって事ないとも言つように淡々と答えた。

「俺が飛んでいけたらなあ〜」

「あのねえ、今はライトさんたちがいるでしょ。あの人たち強いし、またあのメタグロスみたいなのが出てきたら二人だけでどうにかなるの？今は早く着くことよりも、自分たちの身の安全のことを考えなきゃ」

グレイスの説得によつやくフルルは納得したようだ。

「分かったらどんどん行くわよ！」

……その事件が起こったのはその日の午後、休憩をとってから少し歩いた山道での事だった。それは、突然現れた。

「おい！お前ら！この前はよくもやってくれたな」

近くの草むらから飛び出した黒いポケモン、グラエナは、4人に対してそう叫んだ。

「お前は、3日前の……」

そう、彼は3日前にいきなり飛び出してきて、ライトに瞬殺されたグラエナだった。

「そうだ！俺は3日前にそのジジイにボッコボコにされた……。だから！今日はその復讐に来たんだ！」

そう言ってライトの前に立つグラエナ。

「いいじゃろう。だが、わしに勝てるなんて思うんじゃないぞ」

ライトも、一步前に踏み出る。

「それはどうかな。見ろ！俺の特訓の成果を！」

最初に仕掛けたのはグラエナだった。

「みがわり！」

グラエナは身代わりで自分の身代わりを作り出す。

「ほう、じゃがわしは一人で十分じゃぞ」

ライトはいたって冷静そうだ。

「いつまでもいい気になるなよ！かみくだく！」

おそらくグラエナの身代わりだと思われる方が、ライトに飛びかかる。しかし、ライトはその動きを冷静に見極めてかわってしまった。

「お前さんの力はその程度か。たいしたことないのう。はっばカッター」

ライトが放った一撃で、グラエナの身代わりは消滅してしまった。

「まだまだ！あなをほる！」

グラエナは、穴を掘って地中に隠れた。ライトは地震が使えるというのに大丈夫なのだろうか、とフールが思っていると、

「わしは手加減などしないぞ。じしん！」

当然の如く、地中にいたグラエナは地震の衝撃を直接受け、地上に飛び出してくる。グラエナはもうフラフラだ。

「もう、諦めるんじゃない。その体では何もできんじゃない。」

しかし、グラエナは諦めてはいなかった。

「……まだ、まだ…シャドーボール！」

グラエナの放ったシャドーボールは、ライトに向かって一直線に飛んでいった。そして、ライトに当たった。

「やったか……！？」

しかし、そこにライトの姿はなかった。

「なんだと！？」

「どこじゃー！」

ライトは、前と同じようにグラエナの後ろに立っていた。

「いつの間に……！？」

「わしの素早さをもってすれば、このくらいのこと、なんともないわい」

「くっ……！」

もうグラエナに技を出す力は残されていなかった。ついにグラエナは諦めたようだった。そして、

「俺にはまだ修行が……」

そう呟き。森の中へ戻っていった。

……その夜、あんな事件があったのにもかかわらず、食事をしたフールとグレイスは早々と寝てしまっていた。

「二人とも、もう寝ちゃったね」

ぐっすりと眠っている二人を見ながら、ゲイルは呟いた。

「今日は、かなり歩いたからのう。わしも疲れたわい」

言っていることは対照的に、まったく疲れを感じさせない様子のライトにゲイルは、

「ライトも寝なよ。多少は戦ったんだし疲れたでしょ」

その言葉を聞いてライトは頷くと、「どっこいしょ」と体を地面に下ろし、寝る体勢になった。

「お主も寝るのか？」

ライトの質問にゲイルは、首を横に振った。

「僕は寝ないよ。前と同じように見張ってるから」
「そうか……。よろしく頼むぞ」

そう言ってライトも眠ってしまった。

その夜、ドダイトスの背中の木にとまったポケモンが、寝ることはなかった。

第十三話 W・Pに向かって（後書き）

正直言うと、この話は話数かせgg……

？「そんなことはない！」

だれだ！？

グラエナ「俺だぜ〜」

……君は確か…大口叩いてた割には、ライトさんに一度ならず二度までもやられたという、あの弱いグラエナか〜

グラエナ「なんか、余計な言葉がかなりくつついてるような……」

で、さっき言ったことはどついう事なの？

グラエナ「ああ、それはなあ、俺の活躍が……」

ぷっ……！

グラエナ「何がおかしいんだ！」

活躍してないじゃん……

グラエナ「……（涙）だけど、次回は……」

次回があればね。では今回はこの辺で

第十四話 隠し事（前書き）

隠し事……

いったい誰のかつて？

それは、読んでからのお楽しみですよ

第十四話 隠し事

「はあ、困ったなあ……どうしてこうなったんだろう」

青く澄んだ空を見上げながら、その男、デリバードは呟いた。

出発してから一時間、昨日と変わらず4人は森の中を歩いている。前にフルとグレイスが、少し離れて、後ろをライトとゲイルが歩く。いつもと同じだ。ただひたすら歩いていたフルはふと思う。

こんな調子で本当にW・Pにたどり着けるだろうか。なんとなくだが、なにか強大なものが俺たちに関わっている気がする。パルス村の事件だってそうだ。あのメタグロスの正体は結局分からなかった。

……それに……実は、あの二人、ライトとゲイルのことだってまだ完全に信用しているわけではない。確かに、俺たちに協力してくれていなくもないが、向こうからこちらに近づいてきたのだ。何か理由でもない限りそんなことはしないはずだ。しかも、ここ最近、正体

は分からないが何者かに見られている。そんな気がするのだ。昨日だって、森の中からこちらを見ている影を見かけた。あの二人が原因とは限らないが……。

そのことを踏まえると、これから先、何も起こらないという保証はない。つまり、また事件が起こるかもしれないのだ。まあ、何事も用心に越したことはない。

とりあえず、今日は様子を見ることにした。

出発してから三時間。あの二人は黙々と歩いていく。もくもくすると、さつきから後ろをちらちらと見ているフールに気づいたのか、グレイスがフールに近づき小さな声で話しかける。

「どうしたの？さつきから後ろはすっかり気にしてるけど」

まずい。疑っていることがグレイスに知られたら、どうせ「あの人は絶対いい人たちよ。そうやって、簡単に人を疑うのはよくないわ」なんて言われるだろう。ここは何としてでも、誤魔化さなければ。そうだ、あの事を使おう。

「実は……昨日から誰かにつけられるような気がするんだ」

「えっ！？それってどういうこと？」

「気のせいかもしれないけど、昨日、森の中から誰かがこちらを見ているのを見かけちゃって……」

それを聞いて、「うん」と、考え込むグレイス。なんとか話して食いつかせることが出来たみたいだ。

「どうする？」

「ひとまず、ライトさんに……」

そう言って、グレイスがライトたちに声をかけようとするが、フルはそれを止める。

「なあ、いつもライトさんに頼るのはライトさんに悪いんじゃないか？たまには自分達で解決しなきゃ」

「わたし達が頼ったことなんて、あったっけ？」

「しまった！頼ったことなんて無かったんだ……」

「でも……それもそうかもね……。わたし達で出来るかな？」

「できるさ！心配しないで。それじゃあ、今夜、実行しよう」

ひとまずはやり過ごせたみたいだ。仕方ない、とりあえず、今夜の計画を立てておかなきゃ。

その頃、フルとグレイスの後ろを歩くライトとゲイルは、二人と同じように小さな声で話していた。

「フルは僕達を疑ってるみたいだね。さっきから、ちらちらこっちを盗み見てるみたいだし……」

「まあ、仕方ないじゃろう。彼のことなんじゃから。そんなことよ、ゲイル、お前さんは気づいておるかのう？」

「気づいてるよ。誰かは知らないけど、つけられてるね」

ゲイルは周りを見渡す。だが、誰かがいる気配はない。

「完全に気配を消しておるようじゃの。相当のプロと見た」

「……じゃあ……」

「その可能性は高い。じゃが、奴らのことじゃ、奇襲を仕掛けてくるなら夜になるじゃろう」

「じゃあ、ひとまずは安心だね」

そつと胸をなで下ろすゲイル。

しかし、ライトの表情は険しいままだ。

「どうしたの？」

「……このことをあの二人に話すべきかのう？」

確かに、二人に話せば、突然の襲撃によるパニックを無くす事が出来る。しかし、二人に話せば確実に理由を聞かれるだろう。それは、今の二人にとっては良くない状況だ。

「うーん……話さないほうがいいんじゃない？ 追跡者は、二人が寝た後に僕らだけで倒せば問題ないと思うよ」

「そうじゃな。そうするしかないようじゃ」

もう、それしかない。というか、それ以外、考えられなかった。

両者ともに隠し事をしたまま、昼の食事の時間になった。もう喋る事がないのか、はたまた隠し事のせいか、会話は全く無かった。

出発の時になってようやくグレイスが喋った。

「もうすぐ、山みたいね。険しい道になりそうだから、気を付けて」

みんなに向けた言葉だ。

険しい道のりってことは、飛んだほづがいいのだが……
ライトたちはどうするのだろうか？

しばらく歩くと、岩肌が露出した高い山が見えてきた。

「なるほど、あれか……」

確かに、あんなに岩だらけだったら、歩くのは難しそうだ。

「思ったより険しいわね。どうする？」

「……とりあえず、麓まで行ってみようか」

フルは後ろのライトとゲイルにもきいた。

「わしらはどちらでも構わぬが……ゲイルはどうじゃ？」

「ん〜？僕も構わないよ。二人に任せるね」

麓に着いてから考えるという案で大丈夫のようだ。

「あれ？あんな所に誰がいるよ？」

また少し歩いた所で、誰かが道端の切り株に座っているのが見えた。

「こんな所でどうしたんだろうな」

「声、かけてみようか？」

向こうも、こちらに気づいたようだった……

第十四話 隠し事（後書き）

またしても新キャラを出してしまった……

フル「でも、名前すら分かってないじゃないか」

それは次回で分かるとも。

そして、これからの数話は新キャラをどんどん出していききたいと思つてます。

フル「出しすぎて、ネタ切れになるなよ」

（たぶん）無い無い（汗）

フル「カツコの文字がすごく気になるんだが……」

第十五話 配達員デリバード（前書き）

今回は結構長いです。

そして、その割には展開が早いという。

タツ「タイトルが本編とは関係ない気が……」

これ以外思いつかなかったので……（汗）

第十五話 配達員デリバード

切り株に座っているデリバードは、何か悩んでいるようだった。

「あの〜、すみません」

グレイスは切り株に座っているデリバードに声をかけた。

「はい？」

「あの、どうかしたんですか？」

デリバードはフルたちの顔を見渡すと、

「君たちもこの先の山を超えるつもりかい？」

「ああ、そうだけど、何かあるのか？」

すると、デリバードはため息をつき、

「実はね、この先でエアームドとボスゴドラが道をふさいでるんだ

よ

「何かあったのかな」

「いや、ただ性格が悪いだけらしい。全く、困ったもんだ」

やれやれと首を振ってみせるデリバード。

「それじゃあ、通れないじゃないか」

「困るわね……。今更遠回りしようにも、だいぶ戻らなきゃいけないし……」

この道が使えないとなると、かなりの遠回りを強いられる。ただでさえ、パルス村の事件のせいで、予定よりだいぶ遅れているというのに、さらに遠回りするとなると急いでいる今の自分たちにとっては色々と厄介だった。

「仕方ない、言葉が通じるような連中じゃなそうだから、ここは力づくで通るしかなさそうだな」

「出来ればそうしたくないけど、それしか方法は無いみたいね」

そんなことをしている奴らはだいたい弱いはず。それくらいの相手なら簡単に倒せるだろう。

「力づくって……まさか君たち、バトルであるエアームドとボスゴドラに勝とうって気なのか……？」

デリバードはどうやら二人がエアームドたちを倒そうと考えていることが信じられないようだ。もしかしたら、エアームドたちはもの凄く強いかもしれない。

デリバードは少しの間考え込んでいたが、「彼らならもしかすると……」と呟くと、

「君たちに賭けてみるよ。僕の名前はウィン。配達員さ。今日はこのあたりの村に郵便物を届けるためにここまで来たんだ」

そう言われてみれば、彼が肩に掛けているのは、配達員が使用する郵便物専用の鞆だ。

「俺はフル」

「わたしはグレイスよ。そして、この二人はライトさんとゲイル君」

そうして、五人は再び歩き始めた。

「ところで、ウインは飛べるのに、どうしてこんなところを歩いているんだ？」

フルには、翼を持つはずのデリバードが、空を飛ばずに歩いていることが不思議だった。

その質問にウインはすぐに答えてくれた。

「どうやら、この辺りには乱気流が発生しやすいみたいです。だから、僕みたいなのが飛んでいこうとすれば、すぐに飛べなくなるどころか、どこかへ飛ばされてしまうので、あえてここを歩いてあるんです」「なるほど」

空の環境が悪いことは、空を戦いの場とする飛行タイプにとってかなり厄介なことだった。

エアームドたちと戦うときは気をつけないと。

しばらく歩くと、山の麓付近に彼らはいた。どうやら、彼らもこちらに気づいているようだ。

「おい、お前ら！悪いがここは通れない……お前はさっきのデリバードじゃねえか。何だあ？強そうな奴らに助けてもらおうってか？」

相手のボスゴドラの脅すような口調にウインは思わず縮こまる。すると、今度はエアームドがウインを見て。

「けっ！俺にボコボコにされた分際で、ナメた真似してくれなせ。

……まあいい、そのフリーザー！俺たちと戦いたいんだよな？」

「ああ、そうだ」

「いいだろう。だが条件がある。それは、バトルは俺たちが指定した奴と1対1で行うってことだ。もしそれが納得出来ないなら、諦めて帰るんだな」

もしその条件だと、鋼タイプである彼らは確実に氷タイプのフルとグレイスを相手に選ぶだろう。それでは、こっちが不利だ。

ここで、フルはふと4人で彼らに不意打ちを仕掛けるという考えに至るが、

「言うておくが、もしお前ら5人で俺たちを攻撃しようとしてみる。そんな事すれば、近くで見張ってる俺の仲間たちがすぐに駆けつけて、お前らを二度と歩けない体にしてやるからな」

不意打ちは無理か……

その時、

「いいじゃらう」

「「え!？」」

突然話に割って入ってきたのはライトさん。

「わしらは急いでいるんでな。こんな所で足止めを食らう訳にはいかんのじゃ」

なぜだかライトさんのその言葉からは焦りが感じられた。

「なに、お前さんたちなら大丈夫じゃよ。わしらが保証する」

「そうだよ、フルルやグレイスがあんな奴らに負ける訳ないよ」

そうだ、何弱気になってたんだろう。俺たちが、あんな奴らに負ける訳ない。最初から分かってたはずだ。

フルルとグレイスは黙って頷き、エアームドたちの方を見る。

「いいかあ？まずは、俺からだな。……じゃあ俺はお嬢ちゃんの相手でしてやるうかな」

まず、ボスゴドラが選んだ相手はグレイスだ。

「先攻はお嬢ちゃんからどう……」

「アイアンテール!」

ボスゴドラが言い終わるか終わらないうちに、グレイスは攻撃を仕掛けていた。しかし、ボスゴドラはそれを難なくかわす。

「不意打ちのつもりかあ？まだまだ甘いねえ、お嬢ちゃん」

「ちよっと!さっきからお嬢ちゃんお嬢ちゃんって、ふざけんじゃ

ないわよ！わたしにはグレイスっていう名前がちゃんとあるの！」「
どうやら、グレイスはお嬢ちゃん呼ばわりされたことを怒っている
みたいだ。

「ハイハイ、分かりましたよ。メタルクロー！」

至近距離で繰り出された攻撃だったため、グレイスはかわすことが
できなかった。

「ッ！やるわね！こおりのつぶて！」

「だから甘いつて言ってるだろ！」

グレイスが放った氷の礫はボスゴドラが振り下ろした腕に弾かれて
しまった。

「れいとうビーム！」

しかし、それもまた避けられ、地面に当たる。ビームが当たった所
には綺麗な氷の柱が出来上がっていた。

「バトル中にそんなのを作るなんて余裕じゃねえか」

「まあね。あなたが相手ならそれくらい余裕よ」

「言ってくれるねえ。ストーンエッジ！」

「アイアンテール！」

グレイスは飛んできた岩をアイアンテールで叩き落とすと、ボスゴ
ドラの位置を確認する。

これなら出来そうね。

「れいとうビーム！」

グレイスは、再びれいとうビームを発射した。だが、何を考えたのかボスゴドラがいる方向とは違う方向に撃っていた。

「どこ狙ってるんだあ？」

ビームの先には、さっき作り出された氷の柱。氷の柱に当たった冷凍ビームは氷の中で複雑に屈折し、ぴったりボスゴドラのいる方向へ曲がる。

「何!？」

ボスゴドラが気づいたころにはもう遅い。冷凍ビームは見事にボスゴドラに命中する。

「くっ！何しやがった!？」

「簡単よ。ガラスで光を屈折させるような感じで、ビームの軌道を変えただけの話。力の加減で氷の中にいくつもの層を作れるから、あとはそれをうまく調節すればどんな方向にも反射できるわよ」

……多分、ボスゴドラには理解できていないだろう。

「チツ！あんなもの……。かえんほうしゃ!!」

ボスゴドラは氷の柱を溶かそうと火炎放射を放つ。

「甘いのはどっちかしらねえ？」

その声とともに、火炎放射を放っているボスゴドラの顎に、グレイ

スがサマーソルトの要領でアイアンテールを当てていた。

「グッ！」

流石にダメージが大きかったのか、ボスゴドラは倒れてしまった。

「やられちまったか……。まあいい。おい！！そのフリーザー、決着をつけようじゃねえか」

「ああ！」

すぐにバトルは始まった。両者共に空へ舞い上がる。空に飛び上がってすぐにフルな異変に気づく。

乱気流か……。

乱れた風の流れによって、フルの動きはフラフラしていた。

一方、エアームドはその強靭な鋼の翼によって乱れた風の流れの中でも安定した飛び方をしている。

「どうした！そんな様子じゃ俺には勝てないぜ！？」

「そんなこと……言われなくても分かってる！」

先に動いたのは、エアームドの方だった。

「エアカッター！」

フルは飛んできたエアカッターを氷の礫で相殺すると、反撃にでた。

「れいとうビーム！」

しかし、エアームドはそれをいとも簡単にかわしてしまふ。

「そんなへなちょこビーム、当たるわけ無いだろ！はがねのつばさ！」

エアームドは空中でうまく動けないフルルの元へ、一直線に向かってくる。

それに対して、フルルは氷の礫で迎撃しようとするも、狙いが定まらない。そうしているうちに、エアームドはどんどん近づいてくる。

「そこだ！」

狙いがきちんと定まったフルルは、氷の礫を放つ。だが、狙いを定めている間に力を入れすぎたのか、本来複数の氷が飛んでいくはずの氷の礫は一つの氷の塊となって発射されていた。

「なんだそれは？挑発してんのか!？」

フルルの放った氷の礫、もとい氷の塊は自身の重みで下に落ちていった。そして、エアームドの鋼の翼がフルルに直撃する。

「クッ！」

フルルは体勢を立て直すと、再びエアームドに向き合う。

攻撃を当てられれば……。何とかして攻撃を当てたいのに、うまく狙えないんじゃないんだ。広範囲に攻撃できればいいんだが、残念ながらそんな技は覚えていない……。

そこでふと、グレイスの言葉を思い出す。

『力の加減で氷の中にくつつもの層を作れるから、あとはそれをうまく調節すればどんな方向にも反射できるわよ』

そうか！その手があったか！！

「どうした？何か思いついたのか？」

「その通り。あんたを倒すとしておきの秘策だ」

それを聞いて、エアームドは「フンッ」と鼻で笑うと、

「やってみるよ。自分が伝説のポケモンだからって、調子に乗るんじゃないぞ」

「後悔しても知らないぜ。しろいきり！」

フルルの使った白い霧で、フルルの姿が完全に見えなくなる。

「そんなことしたらお前は何も見えなくなっちゃうじゃねえか。何考えてんだ？」

今なら、こっちの姿が見えないフルルに攻撃を当てる事は簡単だ。だが、霧の中で何をしているか分からない以上うかつに攻撃するわけにはいかない。

ここは、安全策の霧払いを使ったほうがよさそうだな。

「れいとうビーム！」

「おっと危ねえ。きりばらい」

れいとうビームをかわし、霧払いで白い霧を払うとそこには、白い霧をする前と同じ場所にいるフルルの姿が。彼の姿を見るからには、何か変わった様子は無い。

「どうした？それだけか？」

「……よく上を見ている」
「!?!」

エアームドは上を見た。そこには……

「こおりのつぶて……だと?」

そして、上空から降り注いだ大量の氷の礫はエアームドに直撃した。

「くはっ!!な、何をしたんだ!?!」

大量の礫を浴びてもまだ飛び続けているエアームドは、動揺を隠せないようだった。

「ただ、力の加減を変えたただけだ。力の加減で氷の重さを変えて上空に放てば、時間差で落ちてくる。さらに、落下によって速度と威力を大幅に上げることが出来るってわけだ」

「しろいきりはそのためか……」

「その通りだ」

「……わかった。俺の負けだ」

「なっ!?!」

簡単に負けを認めたエアームドに、フルは驚きを隠せない。

「それだけの實力があるのがわかればそれで十分だ。俺は負けるとわかっているのにバトルを続けたりしないからな」

「本当にいいのか?」

「ああ」

二人は地上に降りる。地上では、先ほどグレイスに倒されたボスゴ

ドラと、グレイスたちが待機していた。

「勝ったのね!!」

「まあ……なんとかな」

すると、ライトがフル側まで来て、

「やっぱり、おぬしなら勝てると思っておったぞ」

「ああ。その……ありがとな。ライトさんが励ましてくれなかったら、勝つどころか戦いもしなかっただろうし……」

「なに、気にするでない。わしらは仲間なんじゃからのう」

やっぱり、彼らは信用してもいい人たちなんだな、とフルは思った。

そう考えると、さっきまで彼らを疑っていた自分が馬鹿馬鹿しくなってくる。

何で疑ってたんだろうな……

そんなことを考えているうちに、今度はエアームドとボスゴドラがやってきた。

「勝負はお前の勝ちだ。約束通り、俺達は帰らせてもらっぜ。……俺達の『強い相手と戦う』っていう目的は果たせたことだし」

「じゃあ、お前達がこの道を塞いでたのは……」

「その通りだ。ここを通る強いやつと戦うためだ。そうでもしないと、俺たちみたいなのはこうでもしないと強い相手とバトルできないからな」

「まあ、いろんな人に迷惑がかかってるみたいだからもうやめるつもりだけど」とエアームドはウインを見ながら言った。

「さて、俺達はこの辺で帰るとするか。今日のバトル、なかなかだった。また戦おうぜ！！フリーザー！」
「俺の名前はフルだ。ちゃんと覚えとけよ！」
「今回は完敗しちまったが……次はこうはいかないからな、お嬢ちゃん」
「うるさいわね！お嬢ちゃんはやめてって言ったでしょ！？」
「ハハッ！そうだったな！」

そうして二人は森の中に消えていった。

「ありがとうございます……」

フルたちが山を越えたころには、もう日が暮れ始めていた。山を越えている間、ウインはフルたちとともに行動していた。彼は配達員としていろいろなところを飛び回っているようで、フルたちにいろいろな話をしてくれた。しかし、彼と一緒に行動できるのはここまで。

「あなた達のおかげで助かりました。本当に感謝してます」

「いえいえ、わたしたちだってウインの話はとても面白かったし、一緒にいられて楽しかったよ」

「その通りだ。俺だって楽しかった」

「わしもじゃ」

「僕も」

彼と別れるのは名残惜しいが、彼には彼の仕事があり、自分達には自分達の目的がある。そうするしかないのだ。

「では、またいつか会いましょう！」

「じゃあな。楽しみに待ってるぜ」

「またお話聞かせてよね」

そして、彼は空の彼方へと飛んでいった。

「さて、そろそろ俺達も出発するか」

ウインの姿が完全に見えなくなると、フルルがそう提案した。グレイスが「そうね…」と言いかけたそのとき、突然、目の前にネイティオが現れた。

「!?!」

そのネイティオは現れてすぐにサイコキネシスを繰り返した。完全に油断しきっていたフルルとグレイスに為す術は無く、いとも簡単に引き寄せられる。そして……

二人の姿とネイティオの姿が消えた……………

第十五話 配達員デリバード（後書き）

タツ「えっ！あの後二人はどうなっちゃったの!?!」

それは次回明らかになります。

タツ「案外早いね」

気にしない気にしない（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3270i/>

ポケットモンスター フリーザー物語

2010年10月16日13時18分発行